

平成30年度
中学生の主張東京都大会
発表文集





発表者のみなさん



努力賞受賞者のみなさん



主催者挨拶



発表者紹介



発表の様子



審査の様子



結果発表の瞬間



受賞おめでとうございます

目次

1 主催者あいさつ……………大澤裕之(東京都青少年・治安対策本部長)……………3

2 発表者及び各賞

知事賞

・「教育」を手に切り拓け……………筑波大学附属中学校……………二年……………國井結月花……………4

東京都教育委員会賞〔氏名五十音順〕

・これからの社会で生きるために……………台東区立忍岡中学校……………三年……………大谷起也……………5

・自己主張は悪いこと?……………東京都立大泉高等学校附属中学校……………二年……………谷本華奈……………6

優良賞〔氏名五十音順〕

・みえないカタチ……………立正大学付属立正中学校……………三年……………赤松愛美……………7

・意思よりも道を……………立正大学付属立正中学校……………三年……………坏琴美……………8

・個性の輝き……………國學院大學久我山中学校……………三年……………池田倫……………9

・増やそう、リアルの友達……………東京都立大泉高等学校附属中学校……………二年……………岩田佳晃……………10

・トータルコミュニケーション……………立川市立立川第二中学校……………三年……………野村未恭……………11

・情報が錯綜する世界……………千代田区立九段中等教育学校……………三年……………藤田実佑……………12

・初めての外国の友達……………工学院大学附属中学校……………三年……………丸山夏未……………13

努力賞 (氏名五十音順)

	・思いやりの連鎖	東京都立桜修館中等教育学校	一年	石田悠人	14
	・「あいさつ」は大切	立川市立立川第二中学校	二年	小野寺汐理	15
	・本当の思いやりとは	杉並区立井荻中学校	一年	小原英佳	16
	・保護犬の目に灯し火を	立正大学付属立正中学校	三年	田中里奈	17
	・命の尊さを語り継ぐ	立川市立立川第七中学校	二年	張替望恵	18
	・これからの日本と政治	台東区立忍岡中学校	三年	藤原実礼	19
	・助け合うこと	調布市立第八中学校	一年	圓宜之	20
	・コミュニケーションの力	台東区立忍岡中学校	二年	山崎恭	21
	・私が人として成長できた理由	葛飾区立青戸中学校	一年	山中穂波	22
	・みんな笑顔でいられるように	板橋区立志村第四中学校	三年	吉田日向子	23
3	審査員長講評	尾木和英(東京女子体育大学名誉教授)			24
4	大会の概要				25
5	募集概要				26
6	応募状況				27
7	前回までの入賞者				28

主催者あいさつ



東京都青少年・治安対策本部長

大澤 裕之

ただ今御紹介いただきました、東京都青少年・治安対策本部長の大澤でございます。「中学生の主張東京都大会」の開会に当たり、一言御挨拶を申し上げます。

本日は、「中学生の主張東京都大会」に御出席を賜りまして、誠にありがとうございます。本大会は、広く都民の皆様にも、中学生の考え方やどのような問題意識をもっているのかを知っていただき、御理解を深めていただきたいと願って実施しております。また、中学生の皆さんが日頃考えていることや将来への希望などを力強く発表することで、自ら成長する機会とすることや自己肯定感が育まればと考えております。

今年度は六、八七八名から作品の応募がありました。その中から厳正なる審査を経て選ばれた十名の皆さんの力作をこの後、発表していただきます。心のこもった発表となることを大いに期待しています。

さて、東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック競技大会の開催まで二年をさりました。今後ますます海外からの訪問者の増加が予想されます。様々な国の方と出会う機会を通して、異文化や障害といった違い

を受け入れ、子供も大人も、多様性を尊重することの大切さを実感していただきたいと思えます。そして、中学生の皆さんには、これまで以上に広い視野と柔軟な発想をもって、未来を担う人となっていただきたいと存じます。

結びに、本大会を開催するにあたりまして、審査員の方々、多くの関係者の皆様に多大な御支援をいただきましたことを改めて感謝申し上げます。開会のあいさつとさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

知事賞



「教育」を手に切り拓け

筑波大学附属中学校 二年

くにいゆづは
國井結月花

「そういうお友だちもいて、良い経験になるわね。」
この言葉を聞いて、みなさんは私にどんな友だちがいると想像するだろうか。
私には、耳の聞こえない友だちがいる。彼とは幼稚園の頃に出会い、家族ぐるみで仲良くなった。私は彼との「会話」をするために手話を覚え、彼が通う学校の友だちともよく遊んだ。そんな私たちに、ある友だちのお母さんが言ったのが先ほどの台詞だ。

「そういうお友だちもいて、良い経験になるわね。」

母は絶句していた。幼い私でも、その言葉がひどく偏見に満ちた、心ない内容だとわかった。会話の手段が音声ではなく手話という違いがあるだけで、彼は他の子と何も変わらない。「経験値を上げるため」に交流をもったわけではない。私はとても悲しくなった。

ただ、この発言だけでそのお母さんを非難することはできないと、今の私から考えられる。私を通った幼稚園は軽度の障害を持つ子も一緒に過ごす環境であり、私にとつては「聞こえない」という障害も「個性のひとつ」くらい意識だった。色々な「個性」がある人が周りにいて当たり前、そう思っていた。しかし、自分で言うのもおかしいかもしれないが、このような考え方に至るのは、障害のある方とあまり接したことがなければ難しいのではないかと、今ではわかる。

これらの経験から、障害に対する偏見をなくし共生社会を目指すには、お互いのことを知るための出会う機会と学びの場が必要だと私は考える。国際連合が定めた「持続可能な開発目標」の第四目標にあるように、教育の平等は世界の課題である。世界には貧困や男女・民族・宗教・障害による差別などの理由で、教育を受けられない子どもが多いのだ。しかし、日本の就学率はほぼ100%とはいえ、いわゆる健常児と障害児は別の学校に通い、交流もない。私を通った公立小学校には支援級もなく、近所のろう学校の存在すら知っている同級生はいなかった。このような状況では「多様性を認める」「共生社会を目指す」といったことの実現に向かっていいるとは思えない。

私が目の当たりにして一番ショックだった偏見が、冒頭で述べたものだ。し

かしこれは、平和ボケとされる日本で生きる私だから、この程度で衝撃を受けたとも思っている。世界に偏見も格差も残っていることは、残念ながら疑いようのない事実だ。それらが原因となって不平等な教育が生まれる。教育の不平等は次の世代の貧困や差別に繋がり、負の再生産が続いてしまうのではないだろうか。

ネルソン・マンデラが「教育とは、世界を変えるために用いることができる最も強力な武器である」と言ったように、人生の初期に教育の場で得た知識や経験は大きな財産となり、人生を切り拓くための道具となると私は信じている。友だちに対する偏見に直面した私が、ただぬくぬくと普通の学校生活を送るだけでいいのだろうか。いや、そんなはずはない。私はまず、この体験を誰かに伝えるべきだと思ひ、この文章にした。そして私は、自分や将来出会う誰かのために道を切り拓く、その道具としての経験を得るために、今の私ができる最大限の努力と様々なチャレンジをしようと決意した。

まず身近なところでいえば、私を通う国立大学附属中学校には、同じ附属校として聴覚障害・知的障害・肢体不自由などの生徒が通う支援学校があり、附属校合同の合宿やスポーツ交流が行われている。しかし、これらの行事に参加してわかったのだが、「オリ・パラ」と頻繁に言われているわりには参加者が少なく、「共生社会」という概念も浸透している印象はない。自分が参加するだけではなく、友だちを誘うなど理解の輪を広げる役割も意識していかなければならないと感じた。

また、言語はあくまでコミュニケーションのツールであり、それは手で会話をしたり手話も変わらない。遊びの中で覚えたものに留まらず、手話も改めて学び、多言語と手話を活かしたボランティアをするなど、様々な立場の人の橋渡しになる活動をするために努力を続けたい。

将来、私がどんな仕事をするかはまだわからないが、人種・性別・宗教・障害の有無に関係なく、この世界のどこかで必要としている誰かのために、自分が得た知識と経験を惜しみなく使える人間に、私はなりたい。

東京都教育委員会賞



これからの社会で生きるために

台東区立忍岡中学校 三年

おおたに たつや
大谷 起也

東大の学長は言いました。「新聞を疑って読んでいるか？」と。この「疑って読む」とはどういうことを言っているのでしょうか？今日はほくがそのことについて考えてみたことを話したいと思います。

まず、みなさん、中国産の食品というところなイメージを持ちますか？中国産は危険、確かに、そんな人もいるかも知れませんが、しかしそれはみなさんが、まんまとメディアにだまされていた、ということを表しているのです。実は中国産の野菜はあまり危険ではありません。にもかかわらず中国産の野菜ばかりがあんなに報道されるのか。それにはちゃんとした理由があります。日本が中国産の野菜を多く輸入しているから。たったそれだけの単純な話なのです。具体的な輸入件数でいうと中国は65万431件、ちなみにアメリカは23万4245件で中国はアメリカの約3倍です。次に違反件数です。違反件数は中国221件、アメリカ190件。中国はアメリカとほぼ横並びとはいえない1位。中国がよく報道されるのはこのせいなんです。やっぱり中国産の野菜は危険なのでしょうか。でも、少し考えてみてください。違反率というものがあります。検査した食品のうちどれくらいが違反しているかというものですが、それでは中国0.22%、アメリカ0.81%とアメリカの4分の1しか中国は違反していません。やはり、輸入量の多さが数字を大きく見せていただけなのです。

ではなぜほくたち消費者に中国のものは危険だ、というイメージがついてしまったのでしょうか。それは報道の仕方に問題があります。中国産の野菜から基準値を超える農薬が出たり中国国内で事件が発生するたびに大々的に報道することで、ぼくたちは中国のものは危険だ、という意識をもってしまうのです。

他の国とはどうなのかなどに注目しているニュースは残念ながらあまりありませんよ。

このようにメディアの情報は全てが正しいとは限らないということをみなさん分かりましたか？でも、だからといってメディアの情報を全く使わずに生活するというのはできませんよ。ではどうやって生活すればいいのでしょうか。

実は、それが最初に述べた東大の学長の話「疑って読む」なのです。その情報は真実か？そのメディアは信用していいのかどうか、それを見極めるということです。この力をメディアリテラシーといいます。ほくはこの力こそ今の時代最も必要とされている力の1つだと思います。

ではどうすればその力を身につけることができるのでしょうか？例えば教育の現場では確かにインターネットでのトラブルなどについて注意喚起しています。しかしそれだけで本当にトラブルに巻き込まれない力がつくのでしょうか？もつと広く一般の人が簡単にできることはないのでしょうか？

僕の考える解決方法は疑ってみることです。難しく考えるほどではありません。少し怪しいなと思ったらちょっと自分で調べてみたり自分で考えてみたり、そんなことだけでもメディアの情報をうのみにするよりはるかに効果があるはずです。

疑うなんていうと聞かえが悪くてやりたくなくなるという人もいるかもしれませんが、自分で自分の身を守る、その為にも疑う心を持つこと、それがウソのニュースにだまされない一番の対策であると思えます。

東京都教育委員会賞



自己主張は悪いことか？

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

谷本華奈

あなたは、周りに流されずに自分の考えを述べることができますか。私にとってそれは大きな勇気が必要なことでした。

小さい頃は、人前に立って自分をアピールすることが好きでした。友達と考えが分かると、彼女は どうして そう思うのか、よく相手の気持ちになって考えていました。他の人と自分が違って当然で、そのことを面白いと感じていたのでしょうか。自分だけでなく相手の個性も認めてあげることができていました。

小学校高学年の初め頃、急に仲が良かった一つ上の先輩にそっけない態度をとられるようになりました。私には仲違いをするきっかけの心当たりが無く、彼女になぜこのようになってしまったのか尋ねました。するとその彼女は「いちいち主張してこないで。すごく不愉快。」と言って私の頭を叩きました。一瞬頭の中が真っ白になりました。私は今、叩かれた。なんで叩かれたんだろう。あ、痛い。頭がぐらぐらする。気付いた時には涙が出ていて、逃げるように家へ帰りました。疑問と痛みと恥ずかしさが一度に込み上げてきて、押しつぶされそうでした。自分の部屋で私は決心しました。みんなと違うことは悪いことなんだ。出しゃばると嫌われる。だったら周りの人に意見を合わせよう。

それ以降は相手と考えが違っていると、無理矢理自分の考えを押し殺して同意見のふりをしていました。すると前のように非難されるようなことはなくなりました。当時の私はそんな状況に内心ほっとしていた部分がありました。多数派の意見にとどまり、誰かの発言にうなずいていけばいいという安心感。私はそれにとどんでん寝っていききました。しかし、自分を出せずに空回りする日々ToStrレスを感じたことはたくさんありました。友達からも「性格が変わったね」と言われて辛くなった時もあったのを覚えています。

そのまま中学でも極力自己主張を避けるようにしていました。そんなある日、新聞のよく見るコーナーに目を引く記事が載っていました。それは、ありのままの自分を受け入れてくれる人は絶対にいる、という内容のものでした。ある人は会社の面接で気取らずに話したことで緊張がほぐれ、満足する結果を得られたそうです。読み終える頃には、すっかりその一面に心を奪われていました。考えは決して誰かに嫌われるためにあるものではない。自分らしく、楽しく生活できる一つの手段なんだ。そう強く感じた瞬間でした。

それから私は、前のように意見を述べるのが怖くなくなりました。おかしいと思っただけには「それは違うんじゃない」と指摘してあげられたり、自分から物事を提案できるようになれたのです。もちろん同じことを思っていた時は共感することができます。自分を隠さずに打ち明けられたことで、目の前の世界が広がったような気がします。

誰にでも、相手と価値観が異なると、発言する勇気が出ないという経験があるのではないのでしょうか。中には以前の私のように他人に流されてしまいがちだという人もいます。自分を隠す度に一度入ってしまうと、抜け出すのは大変です。今、仲が良い人に嫌われるかもしれないとか、生意気と思われるたくないとか。周りの目を気にしてしまう気持ちは私にもよく分かります。しかし、周りにはそんなあなたを認めてくれる人がきついています。少しずつ殻を破っていった先には、さらに広くて心地良い世界が待っているはずです。各々の個性があるのは、とても素敵なことだと思いませんか。もし人の価値観が全て同じなら、均一なおもしろみのない世界になっていくはず。生み出したアイデアが共有しやすい環境を、少しずつ創っていきましょう。

優良賞



みえないカタチ

立正大学付属立正中学校 三年

赤松愛実

皆さんはみえるカタチとみえないカタチの存在を知っていますか。例えば何かを誰かにしてあげて何かお礼に物をもらった時、感謝の形を物で表現していません。一方、「有難う」と言われた時は感謝の形を言葉で表現しています。また、誕生日や試合で勝ったときなど「おめでとう」とか「お疲れ様」と言われたら心が温まります。人はみえるカタチよりもみえないカタチに触れる事が多くみえないカタチの方が大切だと思います。

私が見えないカタチの大切さに気付いたのは中二の時でした。私が色々な事で悩んでいた時、ある友達がずっと私の話を聞いてくれて相談にのってくれてアドバイスをしてくれました。そのうちに私の悩みも少なくなり、心が軽くなったような気がして素直に笑えるようになりました。その友達がかけてくれた言葉は、私の心を強くしてくれてその友達のアドバイスは私の心の支えになりました。

しかし、みえないカタチである言葉は、時に友達や家族、大切な人を傷つけてしまうこともあります。自分が何気なく発した言葉でも相手にとっては不快であり、心の傷になってしまいます。

つい先日、仲の良い友達とケンカをした時に「私の気持ちなんて分かる訳ないじゃん」と強く言ってしまいました。その時、私はとっさに出た言葉で何も気にしていませんでした。けれど、その友達はとてもショックだったそうです。

ものであれば、壊れたら新しいものに取り換えたり、直したりする事が出来ますが、みえないカタチとなっていて言葉は簡単に直す事が出来ません。私はみえないカタチが人を勇気づける力やその人自身の優しさ、素直さ、心の強さで成り立っていると思います。そして時には人の心を開き、人を笑顔にします。

みえないカタチである言葉はみえないからこそ記憶に残りづらく、物のように保管しておくことが出来ません。だから、感謝の言葉は伝えられる時に伝え、謝罪の言葉は時がたつ前に伝える事が大切だと思います。人はいついなくなってしまうたり、話せなくなってしまうたり、手の届かない所へ行ってしまうか分かりません。今、生きていること、今、その物が目の前にある事は当たり前なんかではなく、奇跡的にその場所に存在するならば手遅れになる前におそすぎないうちに思ったことや伝えたいことを伝えなくてははいけません。

私は、遠くへ引越してしまった友達とケンカしたままでいつか謝れると思っただけでずっと謝れず、最後まで「ごめんね」と伝えられなかった事を今でも後悔しています。たった四文字なのにその言葉がとても重く感じました。みえないカタチであるその四文字は、どこにも残らず周りからみたら私とその四文字を伝えるかどうかは変わらないのかもしれませんが、けれど私の心の中にはいつまでも残り続けると思います。

「後悔したくない。」私は、「ごめんね」と言う言葉は何があっても伝えるようにしています。また、誰かに救ってもらった時、笑顔にもらった時に「有難う」を。友達や家族、大切な人の大切な日、誕生日、記念日には、「おめでとう」を。

言葉はたった数文字にそれぞれの想いがたくさんつまっています。たくさん感情、たくさん後悔がたまっているからこそ相手に想いを伝える事が出来るのだと私は思いました。

そして、私はこれからもみえないカタチを心で感じながら人への感謝や謝罪の気持ちを忘れず一日一日を大切に生きていきたいです。

優良賞



意思よりも道を

立正大学付属立正中学校 三年

あくつ
環 琴 美

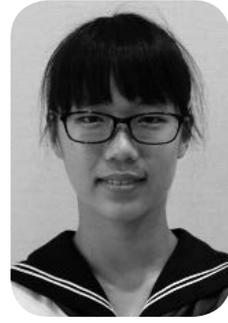
皆さんには、座右の銘があるでしょうか。私にとっての座右の銘は、「意思あるところに道は開ける」というものです。私にとってこの言葉は、何かに挑戦したいと思った時、その最中で心が折れそうになった時、再びその意思を奮い立たせてくれるものです。私がこの言葉と出会ったのは、学年一のピリが難関私立大学に現役合格した、というストーリーの映画を見たときです。主人公の女性が、一年間、ただひたすらに大学合格に向けて努力できたその背景には、片時も主人公の可能性を疑わなかった塾の先生の存在が大きかったのではないかと私は思います。映画の中で私が知った「意思あるところに道は開ける」という言葉もまた、その先生が主人公の女の子に贈ったものとして登場するので、実際にどんな時、私がこの言葉に支えられたのか、そしてどんなことに気付けたのか、紹介したいと思います。

二年生の春、私がキャプテンを務めていたバレーボール部に九人の後輩を迎えました。九人中、五人が経験者という状況の中で、どう声をかけていくべきか、指揮を取っていくべきか悩み、苦しんでいた自分を今でも鮮明に思い出すことができます。自分より遥かに上手な後輩がたくさんいる中でバレーをするということが怖く、重い足を引きずりながら毎日練習に参加していました。当時の目標であった、新人戦での都大会進出を諦めかけた時、私は「意思あるところに道は開ける」という言葉と出会ったのです。この言葉を受けて、まだまだ諦めてはならないと自主練習を始めた後輩と多く関わろうとしたりしました。そして、都大会出場という目標を叶えることができました。新人戦は経験者が集まっていれば誰でも出ることができると、という声もありましたが、自分を強くしてくれた後輩がいてくれ、部員全員で都大会出場という意思を持ったか

らこそ、そこに道は開けたのだと私は思います。その後、春季大会、夏季大会という二つの公式戦の中でレギュラーとして試合に出られない時期もありました。また、二つの大会とも、目標としていた都大会に後一步のところまで進むことができませんでした。しかし、その意思に対して道が開かなかったのかと尋ねられたら、そうではないと胸を張って言うことができます。なぜなら、私たちが開くことのできた道は、都大会出場というただ一点のことではなく、その過程にあるものだからです。そして、このバレーボール部を悔いなく引退することができた今、「意思あるところに道は開ける」という言葉の本当の意味に気付くことができました。それは、意思の上に、その道がつくられる、ということではなく、自分、または自分たちが思い描く意思に向かって努力を重ねれば、たとえその意思が叶わなくとも、それ以上に価値のある努力してきた道を手に入れられるということです。そして、私たちがまた、その経験を糧に新たなことに挑戦していけるのです。つまり、私たちが都大会に出られなかったという結果でそれまでの過程の価値がなくなるということはないのです。

さて、皆さんには今、心の中に意思があるでしょうか。私はこれから、一度きりの人生に華を咲かせられるように何事にも一生懸命に挑戦していきたいと思っています。将来あの時頑張っていて良かった、と自分自身が胸を張って言えるように努力していきたいです。

優良賞



個性の輝き

國學院大學久我山中学校 三年

池田 倫

「こんな顔に生まれたくなかった。」
ある日、私は両親に向かって最低な言葉を言ってしまった。この言葉は両親だけでなく、その祖先に対してもあまりに失礼な言葉だったと、口に出した直後には気づいていた。

私は自分の欠点を見つけると、どうしても人と比べてしまっていた。そして、少しずつ自分に自信が無くなってしまった。

そんな時、私は習い事のピアノの教室で、ある女の子と出会った。その子は足が不自由だった。それだけで、正直話しかけづらいと思った。すると、その子から私に話しかけてくれた。彼女は足が不自由ながらも、ピアノと車椅子バスケットボールを頑張っていると言っていた。足が使えたら、もつと楽しいんじゃないか。私の心の中には一言「かわいそう」という言葉がうかんだ。彼女との会話は弾み、もう障がいなどは関係なく、普通の女の子同士のおしゃべりと何も変わりなかった。彼女との会話は非常に楽しく、刻々と時間が経っていった。それと同時に、少し後ろめたさも感じた。自分と同じ普通の女子中学生なのに、自分から話しかけることをためらっていたからだ。そんな自分を情けなく思い、深く後悔した。

それから、会う度に彼女は明るく挨拶をしてくれ、二人でたくさん話をした。

ある日、私はたまたま彼女のピアノを聞いた。ピアノのペダルは踏めないが、彼女の奏でる音は一つ一つが力強く、気持ちが届いていて圧倒させられた。そして何よりも彼女自身が楽しんでるように見えた。その音色は彼女にしか奏でられない音、「個性」だと私は感じた。もし、私が彼女と同じように足が使えなくなり、ペダルも踏めずにピアノを弾くとしたら、自分の奏でる音に価値を感じられず、楽しく弾くこともできないだろう。そして、そんな障がいを

嫌ってしまうと思った。しかし、彼女はそのようなことを一切感じさせない、生き生きとした演奏をしていた。その時、私はやっと分かった。彼女は「かわいそう」なんかじゃない。「かわいそう」という言葉は今彼女に最も失礼だと思った。そして、彼女の奏でる音、彼女の足も全て「個性」だと思った。だから、その「個性」を簡単に「障がい」と口にしてはいけないと感じた。彼女の演奏を私はこれからも一生忘れないだろう。人と違うということは障がいでも弱点でもなく、「個性」である。私は彼女からそのことを教えてもらい、前より自分に自信がもてるようになった。

そして、「私と小鳥と鈴と」という詩を思い出した。金子みすゞさんの有名な詩で、今なら意味もよく理解できる。「何かに優れている人だけが素晴らしいのではない、皆が同じである必要もない、それぞれに個性があつて素晴らしい。」私はこのような意味ではないかと思う。「みんなちがってみんないい」の意味が以前よりも深く感じられた。

自分と同じ人間なんて一人もいない。どの人と接する時も相手の「個性」を認め、寄り添う必要があると思う。また、体や心が不自由な人は「障がい」ではなく、「個性」を持っているということ忘れてはいけない。そして、これから出ていく社会には今よりもずっと多くの「個性」で満ち溢れているだろう。そのような時、人の「個性」を嫌いになつてはいけない。好きな「個性」も、苦手な「個性」も大切に、受け入れなければならぬと思う。皆が平等な未来にするために、人の「個性」に合った関わり方をしていくべきだ。自分の「個性」は欠点ではない。そのことを教えてくれた彼女に感謝している。思い込みや一般論で物事を判断するのではなく、相手のことを正しく理解した上で、その立場や気持ちを考えていける人に成長していきたい。それぞれの「個性」が輝く社会になるように。

優良賞



増やそう、リアルな友達

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

岩田 佳晃
いわた よしあき

「現実では久しぶりだね」そんな言葉を最近、耳にするようになった。中学校のクラスの八割近くが携帯を持っていて。早い人は小学校中学年くらいから、自分専用の携帯を持つ時代だ。わざわざ会って話をする必要はなく、ラインを使えばどんなときでも連絡を取り合うことができる。僕は、そんな数十年前の人々は想像もしなかったであろう、新しい時代を生きるからこそ、この主張をしようと思う。

ラインを始めたのは、中学一年の春だ。小学校のとき、ラインをしている友達が数人いて、ずっとあこがれていた。クラスの友達とつながり、小学校の友達も友達追加した。そのときの、いわゆる「ライン友達」は百五十人を越えていただろう。現実で関わることの多い人をはるかに上回る人数だ。通知も九百九十九件を越えることが多々あった。通知に追われ、携帯ばかりを見る生活でも、嫌だと思ったことなど無かった。むしろ、充実感を抱いていた。ラインを使って、どんなときでも友達と会話できる生活をとっても楽しんでいた。

そんな中、中一の冬に事件が起こった。ラインのアカウントが乗っ取られたのだ。あるとき、ログインできなくなり、やむを得ず新しくアカウントを作り直した。百五十人を越える友達も全て消えてしまった。使い過ぎて罰が当たったのだ、と母に言われ、一週間取り上げられることになってしまった。初めは、ラインを使えない生活など考えられなかったが、だんだんその生活にも慣れてきた。そして、一つ気がついた。それは、ラインを使わなくても普通に生活できるということだ。携帯を持っていない人だって、学年にいるのに、このことに気づけずにいたのだ。

今もラインは続けているが、ライン友達は五十人程度だ。必要な人だけを追

加するようにした。それで十分だと感じた。実際、今困ることはない。

ラインを否定したいわけではない。ラインは世界中の人と簡単につながるこ
とができる、とても便利なサービスだ。しかし、使い方を間違えてしまうと、
中高生の敵となる。たった少しの充実感の代わりに多くの時間を失ってしまう。
その時間さえあれば、何ができるだろうか。きっと多くのことを犠牲にしてい
る。

昨日はなかった、すばらしいものが今日はある、そんな変化が激しい時代だ。
今のような便利な生活を想像した人が百年前に果たしていたであろうか。逆に、
今の僕たちには想像できないけれど、百年後はもっと便利な世の中になってい
るだろう。そんな数年間の間だけでも大きな変化が生まれる中でも変わらない
もの、価値がある。それは、人と人との関わりだ。文面では読み取ることがで
きない相手の気持ちも、会って話せば分かる。どんなに時代が移り変わってい
ても、人と人との直接的な関わりの大切さは変わらない。

次世代を引っ張っていくのは、僕たち、中高生だ。まったく想像できない未
来がそこにある。その未来を、私たちの想像の創造によってつくりあげていく
ために、今一度現実での関わりの大切さを見直すべきではないだろうか。そし
て、この時代を生きる僕たちが今増やすべきなのは、「ライン友達」ではなく、
「リアルな友達」なのではないだろうか。

優良賞



トータルコミュニケーション

立川市立立川第二中学校 三年

野^の村^{むら}未^み恭^く

沢山の動物の生態や特徴が載っている動物図鑑。でもし、「人」という項目のページがあったら、みなさんは何と書きますか。

人間には沢山の良い所がありますが、図鑑のページ全てにプラスの事は書けないと思います。人は自分と違う考えを持つ人を否定したり、傷付け合ったりしてしまうからです。その証拠に今も文化や宗教、価値観の違いから戦争やテロなどの争い、人種差別などの偏見が絶えません。自分だけでは解決できないこの問題を考えていると、トータルコミュニケーションという言葉があることを知りました。元々は、聴覚障害を持つ人へ手話でコミュニケーションをとった事が始まりですが、今では考え方の違いやハンデなど全てをその人の個性として認め合うという広い意味でも使われるようになっていきます。ナラティブアプローチと呼ばれる事もあり、人はそれぞれがその人だけの物語を持っていて、その物語を共有し理解し合っていくコミュニケーション法です。私には五歳年上のいとこがいます。いとこには、大きな障害と病気があり、沢山の薬を服用しています。薬の副作用で顔がはれあがりむくんでしまっています。高校三年生の時には、病気のせいではなかなか学校に通う事ができませんでしたが、夏休みにも学校へ行き、単位をとるために必死に勉強をして、無事高校を卒業できました。沢山のハンデを抱えているけれど、人一倍努力家の人一倍優しさで溢れています。私が小さい頃、兄とケンカして泣いていると、私を膝の上に座らせて頭をなでてくれました。そして「大丈夫。私は味方だからね。大丈夫、大丈夫。」と言ってくれました。「大丈夫」この言葉は、いとこが言うとき特別で温かい言葉でした。

今いとこはお菓子屋さんで、社会人として立派に働いています。しかし、体調不良になることも多いので、首に緊急時の連絡先をさげながら通勤していま

す。この間、「美味しいから食べてね。」といとこが手作りしたお菓子を沢山送ってくれました。初めていとこが手作りした、そのお菓子の心地よい甘さを、私はずっと忘れないでしょう。毎日楽しそうに仕事をしているいとこですが、過去にはいじめられたり、心ない言葉をかけられたりした事もあったそうです。辛い事が重なる、「薬なんてもう嫌だ。私なんか生まれてこなければよかったの。」と泣いてしまいます。そんな時、いとこの母である伯母が必ず言う言葉があります。「置かれた場所で咲きなさい。」この言葉は、渡辺和子さんという方の言葉です。持って生まれたものや環境は、自分では決められないけれど、自分に与えられた場所で最大限の努力をして、自分らしくいるのが大切だ」という意味です。

トータルコミュニケーションは、そんなそれぞれの場所で咲いている花の良さを、見つける作業だと私は考えます。外見や第一印象だけで思いこんだり、偏見を持つたりするのではなくその人との共通点を探してみたい。それがトータルコミュニケーションの第一歩です。その人は自分と考え方が違うかもしれない。国籍や宗教が違うかもしれない。何らかのハンデを抱えているかもしれない。けれども、一つの思いこみがその人とわかり合えるチャンス奪っているのではないのでしょうか。

人は沢山の言語を持っていますが、言葉を使わなくても心で話すことができ動物だと思っています。もし動物図鑑に「人」という項目のページがあったら、みなさんは何と書きますか。私は「人」という項目に、「自分と異ったものがある人、その人の個性として受け入れて支え合う動物」と書ける日が来ることを願っています。

優良賞



情報が錯綜する世界

千代田区立九段中等教育学校 三年

藤田実佑

あなたが街を歩いていると、一組の母子を見かけた。その男の子はひざにけがをしていたが、子供には少し重そうな荷物を持って歩いていた。この状況を想像してみてもほしい。あなたはと思うだろうか。ここで私が言いたいのは、一つの情報に捉われすぎないように、ということだ。

人は、ある一つの情報を素直に受け取り、間違った方向に話を展開させていってしまうことがよくある。例えば、前述の子供の例。実はこの話は新聞に載っていた記事で、きつと多くの人が「かわいそう」だと感じたことだろう。実際、この話を新聞に投稿したこの子の母親は、「けがをしている子供に荷物を持たせるなんてかわいそうだ」と、道行く人々から非難を浴びた。しかし、本当にそうなのだろうか。この話には続きがある。「かわいそう」だと周りから白い目で見られていた母親だったが、実はこの子は、母親のお腹にいる赤ちゃんをいたわり、自分から持ちたいという意思をもって持っていたのだ。それを知ると、人々は一斉に手のひらを返して「いい子だ」とほめたたえる。一つから二つへと情報の数が変化するだけで、人の考えは大きく変わってしまうのだ。一つだけの情報に頼るのは、勘違いを起こしやすく、極めて危険である。

この勘違いは、時に私たちの生活に関わり、「勘違い」では済まなくなってくる。例えば、熊本地震の際、SNSのとある投稿と画像が話題になった。街中をライオンが歩いている写真だ。その投稿は熊本に限らず日本中の人の目に留まり、波紋を呼んだ。しかし、実際は違った。ライオンは脱走などしておらず、コラージュされた画像だったのだ。良い証拠として使うことができていた画像さえも、現代ではその信ぴょう性が薄くなりかけている。

そうかと言って、文字も一つの情報では信ぴょう性が低い。マスメディア、特に雑誌などには、最新の情報が山ほどある。しかしそこにある記事は、本当

に正しい情報なのだろうか。つい先日、私は雑誌で報じられたものが嘘であった、ということを経験したばかりである。私自身、その時、「一つの情報ではやはり信じるのができない」と実感した。その記事や情報の情報源はどこであるのか、その証拠は何なのか、このように情報を主体的、批判的に読み解く力を「メディアリテラシー」と呼ぶが、私はこの「メディアリテラシー」を持つことがとても大事だと考えている。

これまでの話から分かるように、現実というものは、一つの情報のみでは知ることができない。それを信じてしまえば、被害は自分だけでなく、世界にまで及ぶ可能性がある。しかし、そうなるからでは遅いのだ。そこで私たちは、前述の「メディアリテラシー」を持つことが必要とされる。その情報の情報源を明らかにし、似たような様々な情報を集め、その内容が一致したとき初めて、その情報が正確であることが証明されるのだ。

しかし、初めからこれができる人は少ないだろう。そこでまずは、物事を批判的に見ることを始めてみてはどうだろうか。「メディアリテラシー」の第一歩だ。始めは、最初でできてきた例のような、目を見た様な状況に疑問を持つだけでいい。そしてそれが発達したのちには、考えを深めることができるようになる。私が思うに、特に選挙ではとても役立つと考えていて、自分たちの国の政治を決める上で、大事な能力だと思う。

目の前にあるものが全てではない。これから私たちは、ある一つの情報に踊らされず、しっかり情報を見極め、判断したり、調べたりすることで、柔軟な考えを持たなければならない。きつとそれらは、社会に良い影響をもたらすだろう。

優良賞



初めての外国の友達

工学院大学附属中学校 三年

丸山 夏未
まる やま なつ み

人生で初めて外国の友達ができた。イスラエルの同年の少年だ。私はラトというスポーツで国際試合に出場した。ヨーロッパを中心とした国の代表選手が集まって競う、二年に一度行われる試合だ。試合の三週間程前にコーチから受け取ったプログラムを見て不安を抱いてしまった。出場国の中にIsraelと記載されていたからだ。イスラエルは危険というイメージが少なく、もし試合期間中にトラブルにでも巻き込まれたら…と考えるだけで怖くなった。現地に到着し、出場国の国旗を見て身がすくむのが自分でも分かった。翌日の会場練習の時、イスラエルの選手達の横を通ることがあった。ちらっと横目で様子を見てみると、予想とは全く違って、怖い雰囲気はどこにも感じられなかった。みんな笑顔で会話をしていた。まるで日本の学校の休み時間を見ているようだった。その中に同い年くらいに見える一人の少年がいた。せっかくだから話してみたいと思った。

試合期間中、驚きの情報が耳に入ってきた。それはイスラエルで戦争が始まったというニュースだった。しかし、その日の夕食でのイスラエルの選手達は笑って楽しそうに食べていた。私はいくつか疑問があった。試合出発前は戦争が起きていなかったのに、試合を終えて国へ帰ると戦争をしている。この状況を受け入れられるのか。ラトを続けられるのか、聞きたくてしよがなかつた。もし私が少年と同じ状況に置かれたら、ショックで自分らしさを失くしてしまうだろう。私は彼らを怯える目で見える事は無くなった。いつしか尊敬の気持ちを持つようになっていた。そして閉会式後のパーティーで彼に話しかけることを決意した。

パーティー会場に行くと、彼は壁際にいた。人をかき分けながら壁際に向かっ

て歩いている時、自問自答をした。何故こんなにも彼と話をしたい自分がいるのだろう。答えはすぐに出てきた。私の人生の中で彼の存在を絶対に忘れてはならないと直感的に感じたからだ。彼の近くまで来た。

「Hi」と軽くあいさつを交わし、互いに自己紹介をした。そのやり取りの中で同年代だということ伝えると、「一歳か二歳年下だと思ってた。」と、笑いながら言っていた。彼は私のぎこちない英語を聞きとり、会話をしてくれた。十分程話したところでコーチと呼ばれてしまい、最後に言いたい事を伝えた。「二年後にまた話そうね。」すると「そうだね。絶対話そうね。」と笑顔で返してくれた。これが今回最後の会話だ。

日本に帰ってすぐにイスラエルの情勢について調べた。今までは遠い国の出来事だと思っていた戦争が、彼と話したことによって身近に感じた。イスラエルでは十六歳から兵隊になるための教育が義務づけられていると分かった。彼が十六歳になるのは丁度二年後。ただひたすら辛かった。もう会えないかもしれない。もっと話しておけばよかったという後悔と同時に、先人観をもつて見ている自分が情けないと痛感した。

彼は今無事か。ラトを続けるのが可能なのか。少しでも笑えているか。私はふと考える事が多くなった。そして、私ができる事は何か。私がやるべき事は何か。まずはイスラエルについて質問された時、何でも答えられるくらいの情報を得る。それを色々な方法で人々に伝える。試合前の私みたいに先人観をもっている人はまだまだいる。イスラエルの悪いイメージを少しずつ除いていくのが今私が最もやるべきことである。これからもそうした思いを人々に伝えていきたい。

努力賞

思いやりの連鎖

東京都立桜修館中等教育学校 一年

石田 悠人
いしだ ゆうと

先日、私の下校中の電車内で、印象的な出来事を目にした。だから、鮮明に覚えている。私は、座席に座っていた。すると、近くに大きなお腹をした妊婦さんが一人立っていた。妊婦さんが所持していたかばんについていた「お腹に赤ちゃんがいます」というマタニティマークですぐに分かった。私は、妊婦さんに席を譲ってあげようかなと思った。しかし、譲る勇気をなかなか出せず、ためらっている内に座っていた男性が席を譲ってあげていた。私には、礼を言わずに席に座った妊婦さんが少しおだやかな表情になったように見えた。やはり、妊婦さんにとってずっと立っているのは、つらいことなのだなと思った。その分、妊婦さんに自分から譲れなかったことにとっても後悔した。もしかしたら、電車内で人に席を譲るなんて当たり前だと思いかもしれない。しかし、初対面でのような反応をするか分からない人に思いやりを持って接することは、私にとって勇気のあることだった。行動が頭についていかなくなる。このように、誰でも心の中では、少しためらう気持ちが生じるのではないだろうか。

私は、その出来事がとても心残りだった。そのため、帰宅してから母にその出来事を話した。私が、次同じような出来事に出会ったら躊躇せずに行動に移りたいと伝えた。すると、母は自身の思いやりについて話してくれた。母は、職場に向かう途中、駅のホームで赤ちゃんを抱いて多くの荷物をベビーカーに乗せた女性に遭遇したらしい。その駅には、エレベーターやエスカレーターが無かったため、階段を上るときにベビーカーを運んであげたそうだ。すると、母は助けてあげた女性に感謝されたという。母によると、ベビーカーを運んであげたのは、自身が受けた親切につながっているらしい。私が、ベビーカーに乗っていた頃も、同じような思いやりに助けられたという。私が赤ちゃんだっ

た十二、三年前は、階段しかない駅が現在以上に多かった。そのため、赤ちゃんである私との外出は不便だったらしい。駅のホームを行き交うほとんどの人が助けてくれなかったが、その中でも助けてくれた人の思いやりは、今でも忘れられないという。私は、思いやりは、次の世代の人々にもつながっていくものなのだと改めて思った。

思いやりは、人に喜んでもらうためだけにしてあげるものではない。思いやりは、自分が受けた優しさを他人にも分けてあげるためのものでもあると思う。そのように、思いやりの連鎖をしていけば、みんながみんな明るくなるはずだ。私は、これからは自分もしてもらったからといった恩返しのもりで人に思いやりを持って接することのできる人間になりたい。それは、社会全体としては、とても小さな事に過ぎないのかもしれないが、そういった一人一人の意識が社会全体を明るく照らしていく。相手がどのような反応をするかなどは考えず、困っている人がいたら、優しく手をさしのべるようにすべきだ。もちろん、全ての人々がすぐに実行してくれるとは思っていない。ただ、少しでも人に思いやりを持ち、連鎖が続いていったらと思う。今、そのような人だと感じていなくても、少し考え方を変えて行動してみる。その、未来には互いに助け合いながら仲良く過ごす社会が、すぐそこまで迫ってきている。

努力賞

「あいさつ」は大切

立川市立立川第二中学校 二年

小野寺汐理おの であしおり

小さいころから「あいさつ」は大切だと、お母さんに教えられてきた。友達や知っている人には自分からあいさつができるようになったけど、知らない人にするのは苦手でなんとなくさけてしまうことが多かった。

知らない人にあいさつをすることが苦手になったのには理由がある。もともと少し人見知りだったので、知らない人から声をかけられてもすぐに返事ができなかった。幼稚園に入り、たくさんの人と関わる機会が増え、少しずつ知らない人にもあいさつができるようになってきた。でも、そんなときにあいさつをしても返してもらえないことが何度か続き、知らない人にあいさつすることが再び苦手になってしまったのだ。

今では、あいさつを返してもらえなくても気にしないで、知らない人にもあいさつすることを心がけているけど、やっぱり返してもらえないと悲しい気持ちになる。

あいさつを返す返さないには、地域によってちがいがあられるのかもしれない。おばあちゃんの家に行くと、近所の人があたり前のようにわたしにもあいさつしてくれる。昔より近所付き合いは少なくなったとおばあちゃんは言っていたけど、わたしには近所との付き合いが多いように感じられた。

わたしの家の近所では、こんな風には知らない人とあいさつを交わす姿はあまり見かけない。逆に、あいさつをされても返さないで、そのまま無視して通り過ぎてしまう姿はよく見かける。

近所の人との付き合いが少ないから、あいさつをしないことがあたり前になっっているのかもしれない。

昨年夏、わたしは初めて地域のお祭りの手伝いをした。今までもお祭りには

参加していたが、お母さんが役員をやっているということもあり、わたしも手伝いをするようになった。

一日目は知らない人も多く、何をすればいいのかわからなかったから、お母さんに言われたことを少し手伝うだけだった。

でも、二日目はお母さんだけではなく、他の人の仕事もいっぱい手伝った。手伝っていたらまわりにいた人から声をかけられ、手伝いをしていることをほめられたり、「ありがとう」と言ってもらえたりした。わたしはそれがとてもうれしくて、もつとがんばって手伝いをした。すると、まわりの人から声をかけられることがさらに増えた。

この手伝いを通して、人と人とのつながりは、自分の行動や態度によって変えられると実感した。

しかし、今回のような行動をいつもすることは難しいと思う。そのような機会がいつも身近にはないからだ。でも、あいさつをすることはできる。

あいさつは、人と人とのつながりを深めるために自分ができる一番かんたんな行動だとわかった。

だから、これからは今以上に積極的に自分からあいさつをしようと思う。

努力賞

本当の思いやりとは

杉並区立井荻中学校 一年

小原英佳

周囲を気使える人と、周囲に流される人は違います。周囲を気使える人というのは、自分と相手の両方の意見や考えを大切にできる人です。しかし、周囲の人に流される人は、相手の意見を優先しているのではなく、ただ強い者にくっついていくだけです。そしてその行動が自分をだめにし、時には誰かを深く傷付ける事にもなるのです。

私が小学五年生の頃、クラスでいじめが起きました。それは、「Aさんの喋り方が変、みんなができる事ができない。」という理由でした。私はいじめの被害者になったのが、自分と仲の良かった人だったので、まずそれがつらかったです。しかし、もつとつらかった事がありました。それはいじめの被害者になつたのが、幼なじみでずっと仲良くしてくれていた親友だったという事です。実際の所、いじめに加わっていた人はもつといて、力の強い人達が中心となり、Aさんをいじめていました。そもそも、いじめというのは加害者がいなければ被害者が出ることもないので、もし私があこのタイミングで「やめなよ。」と一声かけていけば、いじめは終わっていたのかもしれない。しかし、私からは何の言葉も出ませんでした。実はあの頃、私は周囲に流されてばかりいる人でした。ただ、自分の中ではそれが気使いだと思っていたため、いつも友達の見ばかりに賛成し、絶対に自分の意見を主張する事はしませんでした。「もしそんな事をしたら嫌われてしまう。」「自分の居場所がなくなってしまう。」「そんな事ばかり考えて、Aさんの気持ちなんて考えられなくなっていきます。」「そしてそんな毎日が過ぎていく中でだんだんといじめもエスカレートしていきます。初めは、Aさんをさけていただけだった事が、菌扱いするようになり、掃除の時にいつもAさんの机だけ運ばないで、もし触れてしまったら菌をなすりつけ合う、それが日常的に行われるようになっていきました。また、このよ

うな数人のいじめが、クラス全体のいじめに変わり、ついには私もその一人となりました。二四対一、たえられない程つらいはずなのに、皆「自分がAさんの味方につけば、自分もいじめられる。」と思ひ、誰もとめられないという事がクラス全体の悪い雰囲気につながりました。そんな中、クラスの一人が「相談係」という係に相談した事によってのちに全員で話し合い、約一年間にわたりに続いたいじめはやつと終わりました。

その後、私はこのような事を二度とくり返さないためにどうすれば良いか考えた結果「自分の意見をちゃんと言おう。」と決めました。私は自分の気持ちを言わなかった事がいじめの被害者になってしまった原因だと思います。だから、間違っていると思つたら勇気を出して注意していく事が、私には必要だと思ひました。しかし、実際に行動に移してみると難しいものもありました。初め、自分のいいなりにならなくなつた私を友達はいやがりました。それでもだんだんとまた前のように、分かり合えるようになりました。

私がおかした今回の過ちは、決して許される事ではありません。しかしそこから多くの事を学べたと思ひます。「Aさんを深く傷付けてしまった事実を消す事はできない。」という事、「誰かをいじめるのは簡単でも、その傷をうめるのには数えきれない程の時間がかかる。」という事など大切な事を一つ一つ心に刻む事ができました。それでもまだ、ほんのたまに同じ過ちをくり返してしまひそうになる時があります。その時は、一緒に相手を攻撃するのではなく、きちんと注意をしたいです。そしてみなさんにも、思いやりの中には、相手をも思つた厳しさもあるという事を知ってほしいです。

いじめによつて苦しんでいる人を一人でも多く救うために。

努力賞

保護犬の目に灯し火を

立正大学付属立正中学校 三年

田中里奈

みなさんは、何かペットを飼っていますか。犬に猫、ハムスター、うさぎなど、どの動物も愛くるしくてたまりませんよね。そんなペットたちですが、時には人間の勝手な理由や都合で幸せを奪われてしまうことがあるのです。

私は小さい頃から動物が大好きで、よく両親と動物園に行ってはふれあい広場で小動物たちと遊んでいました。年齢を重ねるごとに動物への愛情は大きくなり、中学に入る頃には両親に、「犬が飼いたい」とよくねだっていました。そして、ついに中学三年生の時に「犬を飼っても良い」という許可ができました。しかし、喜びもつかの間、どこでどんな犬を飼えば良いか途方に暮れた私はたくさんさんのペットショップを訪ねながら、ショークースで目を輝かせている子犬たちを見て、あれもいいな、これも可愛いと中々決められずにいました。そんな時でした。母から驚きの提案が出たのです。それは、「保護犬を飼ってみなにか」というものでした。ほ、保護犬だって!? 私は固まってしまいました。犬を飼ったことがあるならまだしも、飼ったことがないのに保護犬だなんて、と思います。その時の私は、「保護犬」という言葉に抵抗があったので、母の提案が嫌で嫌で仕方ありませんでした。それでも母の強い意志には勝てず、しぶしぶと保護犬の譲渡会へ足を踏み入れました。そこで私が目にしたのは信じられない光景でした。足が上手く動かせない犬、目が見えない犬、人間を異常な程に恐がる犬。そしてどの犬もペットショップで見た子犬とは全く違う、悲しい目をしていました。この瞬間、私の保護犬に対する目が変わったのです。そこから、保護犬の事を火がついた様に調べ始めました。

保護犬は人間がある都合で飼えなくなり、保護団体に保護された犬のことを指します。しかし、保護犬として保護される犬はまだましな方で、中には保護

さえされない犬もいるのです。では、その犬たちはどういった末路をたどるのでしょう。平成二十八年度の犬の引き取り状況によると、引き取られた犬の四分の一は殺処分されてしまっています。人間で考えると、三十人のクラスの中の七、八人が何の罪もなく殺されるのです。そう考えると、ゾクッとしますよね。それも、決して安楽死するわけではなく、小さなうす暗いシエルターの中で毒ガスをかけられ苦しみがきながら息たえているのです。人間は彼らの苦しみなどみじんも考えずに犬を捨てています。私たちは保護犬や殺処分のことをよく知り、行動して、これをくい止めるべきなのです。

私たち人間がこうして一秒ずつ生きていく間に、何匹もの犬が悲しい目で世界を見わたし、番がきた犬はもがき苦しんでいます。私たちが行動で出来ることは決して多くはないかもしれませんが、ですから、少し保護犬のことに興味をもつだけでもいいのです。また、もうすでに犬や猫を飼っている方は、その小さな命を大切にしてください。今から何かペットを飼おうと思っている方は、一度でもいいので保護犬を飼うことを検討してみてください。私が今飼っている元保護犬の愛犬の目にはもう悲しみは映っていません。犬たちの悲痛な目に灯し火をつけることは、誰でもできることなのです。たくさんさんの命と向き合い、手を取り合えば、全ての命に灯し火がつき、大きな光になると、私は考えます。

努力賞

命の尊さを語り継ぐ

立川市立立川第七中学校 二年

張替望恵

私たちは本当に戦争の恐ろしさを知っているのでしょうか。
 広島に原爆が落ちた日のことを知らない人が多くなっているという新聞記事を読みました。また、被爆者の方々も高齢になり、被爆体験を語る事が難しくなっているという事実があります。

だからこそ今、私たちはもつと戦争のことや原爆の怖さを知って、次の世代に戦争がどんなに怖い事を語り継いでいかななくてはいけません。もう絶対戦争は起きてほしくない、起きてはいけない事だから。

私には、広島に今年九十四才になるおばさんがいます。おばさんと話していると、笑い声が絶えずとても元気になれます。戦争を経験したとは思えないくらいにいつも明るく、元気です。でも、もう高齢です。だから、当時経験した貴重な話をいつかは聞けなくなってしまうのです。

おばさんは旦那さんを原爆で亡くしています。当時、おばさんのお腹の中には、もうすぐ産まれてくる予定の赤ちゃんがいました。旦那さんは、早く赤ちゃんの顔が見たいと誰よりも楽しみにしていたそうです。でも八月六日、仕事で広島市内にいた時に原爆に遭ってしまいました。ケガをした体で何日も歩いて、なんとか家に帰ってきたそうです。どうしても赤ちゃんの顔が見たいと頑張っていたけど、数日後赤ちゃんの顔を見ることもできず、亡くなってしまいました。そして、八月十五日に終戦をむかえ、その五日後に赤ちゃんは産まれました。戦争が終わって七十三年。その時に産まれた赤ちゃんも一度もお父さんの顔を見ることなく、今年七十三歳になりました。これは、母が私に語り継いでくれた話です。

語り継ぐことがいかに大事かを書かれた本があります。この本は被爆者の方

の体験が書かれた本です。被爆者の方々が恐れていることは、人々が原爆の恐ろしさを忘れてしまうのではないかとこの本を読みます。この本を読み、被爆して七十三年が過ぎた今も、ずっと苦しんでいる人がいることがよく分かりました。被爆者にとって「生きる」とは、「苦しみに耐える」ことなのです。

戦争で亡くなった方々、今でも苦しんでいる方々の犠牲があつたからこそ、私たちは今、戦争のない幸せな時代で生きる事ができているのです。だから、私たちはちよつとしたことで何事もあきらめてはいけません。私たちも一所懸命生きて、日々感謝の気持ちを忘れずに、語り継いでいかなければいけないのです。

被爆者が「語り部」として活動する際に使う絵を、ある高校の美術部の生徒たちが描いているそうです。「原爆の絵」を描くためには、原爆が落ちた当時の状況を知らなくてはいけません。そうすることで、次の世代にも原爆のことを少しでも伝えていくことができるのでは、という思いから始まった活動だそうです。

被爆者の方々は、あなたはあなたができることで原爆のことを伝えていってほしいとおっしゃっています。被爆者の方々は、命がけで私たちに語り継いで下さっています。私たちはしっかりと受け止めて、自分が次の世代に語り継がなくてはなりません。私には何ができるのか考えてみましたが、まだ分かりません。まず心を込めて知る事から始めようと思います。そして、どうしたらよいか、考え続けていこうと思います。

これからもずっと日本が平和であり続けることを願って。

努力賞

これからの日本と政治

台東区立忍岡中学校 三年

藤原実礼

近所に住んでいるおじさんが言いました。「選挙には行かないよ。どうせ俺が行かなくて誰かしらに決まるんだから。」

皆さんは、この言葉を聞いて、どう感じましたか？私は少し嫌な気持ちになりました。どうしてそう感じたのか、それは昔から母に選挙について教えてもらっていたからです。

日本は昔、満二十五歳以上で国に十五円以上税を納めている人にしか選挙権は与えられませんでした。そう、満二十五歳であってもお金を国に多く払えていない人や女性には選挙権は与えられなかったのです。これにより、選挙に参加できる人だけが有利な政治になり、貧しい暮らしを変えたくても変えられない状況が続いていました。そこから今、長い歴史の中でやっと選挙権を手に入れたのです。そんな大切な権利を放棄するような発言……。それは、やっぱり間違っていると思うのです。

もちろん、冒頭のおじさんのような人はたくさんいます。その証拠に、平成二十九年十月に行われた衆議院議員選挙では全年代を通じた投票率は五十三％と半数近くの人が投票しなかったのです。

そこで私は皆が選挙に参加する為にはどうしたらよいか考えました。まず出張などで選挙に行けない人達のことを調べてみると期日前投票というものがあります。次にお年寄りや体の不自由な方々です。このような方々にとって、選挙場所に行くことも大変だと思います。調べると、選挙できる場所を多くしたり、インターネット利用の選挙が検討されていることも分かりました。

次に若者です。近年、選挙権が得られるのは十八歳からになりました。これは、今の政治に若い世代の声を反映させる為の政策だそうです。ですが、それ

と同時に「若者の政治離れ」という言葉も目にしました。そう、選挙権を得られる年齢を下げるだけでは何も変わらないのです。若者一人一人が、自分の頭で政治について考え、選挙をするというのが必要なのです。その為には、日本の教育を今よりもっと厚くすることが望ましいと思います。今の日本の教育は、教育基本法により政治的中立をとっており、教育現場で具体的な政党や政策について語る事ができないという現状があります。でも、今よりもっと政治に関心をもたせ、政治のしくみ、政策を学ばせることはできると思います。例えば、ドイツでは「政治」という科目があります。学校の授業内で実際の政策を模して討論をしたり、具体的な政党の政策を学んでいるそうです。日本の中学校では、「社会科」の中で歴史や地理などと一緒に政治について教わっています。日本でも「政治」を科目として作り、若者にとって政治がもっと身近なものになれば関心をもてるようになるのではないのでしょうか。

学校だけではありません。家族や地域も大切です。家族や地域の方々など、大人も政治に興味をもたなければなりません。もし大人が政治に関心がなかったら、子供も関心をもてなくなります。まずは大人が政治を身近なことから考えることが大切だと思います。

さあ、これからの社会を作っていくのは私達です。お年寄りや子供、全ての人が暮らしやすい社会の実現。その為には私達若い世代が積極的に社会や政治について考えなければなりません。選挙に参加できるようになる前から政治について一人一人が学び、考えていくこと、それこそが未来の日本を支える第一歩となるのではないのでしょうか。

努力賞

助け合うこと

僕は、発達障害のことについて述べようと思います。なぜかという、実は僕自身が発達障害であることと、最近、発達障害についてとりあげる番組やニュースが増えてきたからです。僕はこの作文のような長い文を書くことや、何かを書き写すなどの細かい作業や、複雑な物事の整理や対応などが苦手です。また、指先の動きが器用でなく、「あれ」「これ」「それ」といった、曖昧な言葉が理解しづらいです。

僕が小学一・二年のときの先生が、学級の友達よりも、「九九」を早くから覚えてやっていくことを進めてくれました。三・四年のときには提出物などの整理ができず、担任の先生が、五時まで僕の居残りにつきあってくれました。小学校の担任の先生に、僕は大変多くお世話になりました。

僕は四年生から通級教室に通いました。通級教室は、僕の苦手な、細かい作業や物の整理、イライラの対処方法について学んだりする所です。通級を紹介してくれたのは、四年生の時の担任の先生です。四年生のときは提出物を出すのが大変でしたが通級の先生と連絡帳に工夫をしました。書き写したり聞いたことを要約して書いたり、単語を何個か聞いていって覚えることはまだ苦手ではありませんが、四年生のころと比べると、自分でも、できることが増えてきたと思います。他にもイライラしたことがあったら深呼吸したり、いやな事があっても、「ま、いいか。」で解決させたりすることで、小学校、中学校での板書で困ることが減ったり、友達関係も築いて行くことができました。しかし、通級に行っていることを、友達に授業をサボっているように言われなにか、心配な時期もありました。けれども担任の先生がクラス全体に通級教室に行っている理由を話してくれました。クラスの友達たちに、分かってもらえてホッとし

ました。通級だけではありません。もちろん父や母も悩みながら僕に力をかしてくれたり、いろいろな工夫をしてくれたりしました。僕は先生方や両親には本当に感謝しています。

でも、このようなふうには、誰もがしてくれるわけではありません。発達障害は、見ためでは分かりません。僕の場合は検査で見つかっただけで、通級に通うことで苦手なことを減らしていただけです。中には気付かないまま大人になつて苦労している人もいます。そのままだイライラなど感情が抑えられず爆発したときに暴力を振つたりする人もいます。僕の小学生の時にも、そんな子がいました。でも怒っていないときには、ヤンチャで面白い子でした。僕は今までのことから、こう思います。子供自身が自分は苦手なことが多いな、自分も発達障害なのかなと気付くことは難しいと思います。だから、周りの人たちが見つけて、理解して行動してもらいたいです。行動といっても、そしてあげることでもそうです。発達障害だけではありませんが、個性として見えてはくれないでしょうか。そして最後に僕は、社会全体から、「障害」という言葉が消えて、「個性」という見方に変わり、人のたりないものを多数でおぎなつて助け合つて欲しいです。これが僕の正直な意見です。

調布市立第八中学校 一年

まとめ
 圓 宜 之
 たか ゆき

努力賞

コミュニケーションの力

台東区立忍岡中学校 二年

山崎 恭

僕が五年生の頃、世界中でテロが起きていました。絶え間なく流れるテロのニュース。それはまるで、テロがありふれたことのように感じられるほどでした。

ある日僕は、A L Tがイスラム教徒だと言われました。イスラムーその単語に僕はニュースで何度も聞いたあのテロ集団、イスラム国を思い浮べたのです。

「テロリストが来るの？」
「僕達殺されちゃうの？」

僕達の先生へのイメージはどんどん悪くなり、僕は先生のことを最悪のテロリストのように考えていたのです。

でも実際の先生はテロなどとは全く無縁の優しい先生でした。

こんな風に、相手を勝手なイメージで判断してしまうことは、実はありませんか？

例えば友達です。僕には昔、話の合わない友達がいました。話していてもつまらないという印象を持っていました。でもそれも、僕の勝手なイメージだったのです。僕は彼と話していく内に、僕は彼のする面白い話、珍しい話に夢中になっていきました。考えの深い彼が熱く語るのを見てみると、彼を今まで勝手なイメージで判断していたことが悔やまれるようでした。

そんな経験があなたにもあるはず。悪い評判がある人を避けたり、皆に悪口を言われている人は嫌ったり。

確かに、皆からその人の悪口を聞いていたら、誰だって相手に悪いイメージを持って当然です。

ですが考えてみてください。もしもあなたが悪く言われる側だとしたら。ある日学校へ行くと、皆があなただけを避け始めます。それはクラスメイトの一

人が、あなたの小さな欠点をとんでもなく大きな欠点のように皆に話したからでした。

確かにその欠点は自分にあります。自分でも分かっています。でも、そんな小さな欠点を、見つけられ、広められ、駄目な人だと思われる。

あなたはこう感じませんか？

「自分には良いところだってあるのに、何で悪いところばかり見られなくてはならないのだろう。」と。

あなたが避けている人だって同じなのです。良いところがあるのです。それに悪いところはばかり見られてきたのかもしれない。

そう、私達は相手をイメージで判断してはならないのです。

そのために私達にできること。それは「話して相手を知ること」です。

相手とコミュニケーションをとれば、おのずと相手の良いところは見えてくるものです。そうすれば相手をイメージで判断することも、相手をよく知らないまま決めつけることもなくなるでしょう。

あるいはいじめだつてなくせるのではないのでしょうか。
いじめで自殺したある少女が、こんな言葉を残しました。

「私には、生きる価値がない。」

価値がない人なんていません。ただ彼女の周りに、価値がないと思わせた人がいただけです。あなたはそう思わせる人になりたいですか。

相手とコミュニケーションをとろうとするあなたの姿勢。それこそが相手の良さを引き出す鍵となります。

まずはあなた自身が、イメージで人を判断せず、誰かと話していただく。きつと、誰かの未来が、そして社会全体が変わっていくはず。

努力賞

私が人として成長できた理由

葛飾区立青戸中学校 一年

山やま中なか穂ほ波なみ

みなさんは、「吃音」と聞いてどういったことを思いうかべるでしょうか？

吃音とは、言葉を上手く発音することができない言語障害のことです。人によって軽度の人から重度の人までいますが、私は軽度の吃音をもっています。吃音という障害がある中で、私はなぜここまで成長できたのかを疑問に思いました。

そこで、今まで吃音をおして経験してきたことを思い出してみました。

「二×七〇十四、二×八〇十六……」

私は、二年生のとき、そろばんの九九のテストでどうしても、二×九〇十八が吃って言えず、だまりこんでしまいました。しかし、その時は、そろばんの先生に吃音のことを伝えていなかったため、

「もう少し練習して、しっかり言えるようにしようね。」

と言われてしまいました。私は、

「本当はわかるのに……。」

と、ひどく落ち込み、家で、くやしくて大泣きしてしまいました。

「どうして私は言葉が言えないの？」

なんで私なの？

みんなはちゃんとできるのに!!

と母にぶつけてしまったことを今でも覚えています。しかし母は、

「大丈夫。ちゃんとそろばんの先生にわかってもらおうね。」

とやさしく私に言ってくれました。私はその言葉にとても救われました。今思えば、それが私にとって初めての「挫折」であり、そして、初めて救われた瞬間でした。

それからは周りからの理解が必要になったため、学校のすすめで「ことばの教室」に行くことになりました。ことばの教室は、私のように吃音があったり、言いにくい音があったりする人が通う通級学校です。吃音で自信をなくしてしまっていた私でしたが、ことばの教室の先生が辛抱強く私のことを見てくださったので、私はだんだん自分に自信がもてるようになりました。

私が成長できたのは、母の助けやことばの教室に通うことだけでなく、「吃音のつどい」というもののおかげでもありました。

私は、それまで自分と同じ吃音をもった人に会ったことはありませんでした。吃音の影響もあり、人見知りがあったので、友達をつくる勇気がなかなかもてませんでした。つどいにはたくさんの方がいますが、初めの頃は私と同じ年の女の子がおらず、私よりずっと大きい中学生や高校生、大学生のお姉さんばかりでした。最初は緊張してあまり話せませんでしたが、次第に打ち解けていき、趣味や吃音の話題などたくさん話ができるようになりました。その後、三つ年下の友達もできて、何回もつどいに通うようになりました。同じ悩みを相談できる友達がいるのは私にとっては、すごく安心して落ち着けることでした。

これらの経験をとおして最近、私はある考えをもちました。それは、吃音を個性にしたい、ということですが、これはだれにでも言えることですが、どんな人でも「マイナス」を「プラス」に変えることはできません。私にとつての「プラス」は吃音を逆に活かし、色々なことにチャレンジできるようになったことです。お店の人に話しかけられるようになったり、委員会の発表で言いにくい言葉を先生に言っておきかえてもらったり、自ら進んで発表できるようになったりと、自分が成長できていることが、最近わかりました。もう一つは、周りの人の存在です。私には、挫折したときに救ってくれた母、どんなときでも私を励ましてくれたことばの教室の先生、同じ悩みをもった仲間がいました。この人達に出会えたことも私にとって大きな「プラス」だと思っています。

自分の短所を長所に変えることはそう簡単ではありません。しかし、それをやりとげようとすると強い気持ち、周りの人の助けがあるから自分が大きく成長することができるようです。私は吃音をおしてそれに気付きました。そして、将来はどんなことがあっても「マイナス」を「プラス」に変え、笑っていられる人になりたいです。

努力賞

みんな笑顔でいられるように

板橋区立志村第四中学校 三年

よしだ
吉田 ひなこ
日向子

私は自分に自信が持てません。自分でも驚くのは一番好きなものを他人に言えないことです。

例えば好きな芸能人の話をしていたとして、みんな一人一人が「私はあの人が好き」だとか、「○○ってかっこいいよね」と自分の好きな人について話すでしょう。そんなとき、私は必ず一番好きな人を言うことができません。自分の好きなものにも自信が持てていないのです。

なぜ好きなものを好きと言えないのか。その理由は実は自分で分かっています。怖いのです。芸能人に限らず、自分の中で一番は本当に特別な存在です。それに支えられたり、そのおかげで頑張れたりして、自分にはなくてはならない存在です。それをもし否定されたらと思うと言えません。私には似合わないだとか、キャラじゃないからとどんどん言い訳をして結局一言言いたいことを飲み込んでしまうのです。

今までそれは自分に自信のないことの表れだと思っていましたが、同時に周りの人間を信用できていないのだということに気づいてしまいました。自分の周りには良い人ばかりだということは自分が一番よく分かっています。それでも、自分から一歩引いて壁を作ってしまう。そんな怖がらなくても大丈夫だと分かっているのに、なかなか素直になれず自己嫌悪に陥っていました。そんなときアントニオ猪木さんの言葉に出会いました。『馬鹿になれ とことん馬鹿になれ 恥をかけ とことん恥をかけ かいがかいて恥かいて 裸になったら見えてくる 本当の自分が見えてくる 本当の自分も笑ってた それくらい 馬鹿になれ』という言葉です。裸になったら見えてくるものってなんだろう、本当の自分ってなんだろうと考えました。馬鹿になれだとか恥をかけだと

か言われても、それが嫌だから人に言いたいことや本当の気持ちと言えないのに！無責任だとも失礼ながら思いました。けれど、誰かに笑われたとしても自分も一緒に笑えるくらい自分という人間は変わるのかもしれないと少し希望を持つことができました。

ここまで自分の今の状況がいかに辛いのかということしか主張してきませんでした。本当の自分が見えてきたら、自分を守ることだけでなく自分以外の誰かも守ってあげたいと思っています。「私はこう思う」と誰かが述べたことを決して否定したくないのです。なんてことのない会話の中でだって本音を言うのはとても難しいことです。少なくとも私はそうだし、私と同じように自分に自信が持てなくても勇気を出して声をあげている人もいるかもしれません。人の心の内は分からない。だから誰が苦しんでいるのかも分かりません。でも、私はそんな人達の気持ちを人一倍理解しているつもりです。せっかくあげた声を否定し、自分の思いを押しつける。そんなことをしては自分に自信がある人しか生きやすい世界になるでしょう。他者を否定せずに、互いに尊重し合い本当の気持ちを気兼ねなく言うことができる世の中であってほしいと願っています。そのために、まずは私自身が笑顔でいられるように一歩踏み出そうと思います。

審査員長講評



東京女子体育大学名誉教授

尾木和英

審査に当たった者を代表して一言申し上げたいと思います。

これから審査をするという時に、期せずして、審査員の皆様方から、「ああ、中学生しつかりしていますね。」という声がありました。十名の発表者の皆さんは、それぞれ自分の身の回りの出来事や、社会で起こっていることに対して自分が感じていることを、しっかりと中学生らしい目で見つめて、形にし、更にまとめて、今日ここで我々に向かって発表をしてくださりました。今回応募してくださった六、八七八名の中学生の皆さんを代表するにふさわしい発表だったと思います。それから、発表者の方々だけではなく、努力賞を受けられる十名の皆さんや、残念ながらここに来られなかった応募者の皆さんを含めて、一生懸命努力をなさったことに対して、まず心から敬意を表したいと思います。

特に、発表してくださった十名の皆さんにつきましては、中学生らしい新鮮な目で問題をとらえ、それぞれが自分の立場で、こういう問題で自分はどうか考えるだろうか、この機会にどう訴えたら良いのだろうかということを考え、チャレンジをしてくださいました。その中で、知事賞及び東京都教育委員会賞を受賞なさったお三方は、話の構成や言葉選び、会場にいらっしゃる方々への伝え方といった点を工夫なさったということが、受賞につながりました。

知事賞を受賞されました國井結月花さんに関しては、問題を自分がどう受け止めて、中学二年生としてどのように考えるのかということ

を真剣に考えるとともに、「今の私ができる最大限の努力と様々なチャレンジをしよう。」という、自分の表現することと取り組もうとすることを重ねた主張をなさったということが、審査にあたる我々の心を捉え、評価として表れたというわけでありました。しかし、十名の皆さんは本当に一生懸命表現をなさっていて、「ああそうか。中学生はこんなことを考えているのだ。」という共感を与えてくれました。さらに、皆さんの訴えが我々に共有され、問題を一緒に考えることができました。

また、自分の考え、主張をまとめること、それを発表すること、が素晴らしいことであることを証明してくださった。本当に意義のある経験がされたと思います。

十名の発表者の方々、努力賞を受賞される方々、今回応募なさった中学生の方々は、本大会に向けて積極的にチャレンジをしてくださいました。ぜひこのことを自分でもう一度確かめて、こんなことが自分ではできたということ、ぜひ自信にしてくださいと思います。その自信を明日からの生活に活かして、私の希望としましては、近い将来大人になつたときに、この社会を支える力として自分の素晴らしい生き方を切り開き、力を発揮していただきたいと思えます。その希望を述べまして、私の講評に代えさせていただきます。

本日は本当におめでとうございました。

平成三十年度「中学生の主張東京都大会」の概要

- 日 時 平成三十年九月九日（日曜日）午後一時から午後四時まで
○ 場 所 東京都庁第一本庁舎 五階 大会議場
○ 主 催 東京都

開 会

一 あいさつ 東京都青少年・治安対策本部長 大澤 裕之

二 中学生の主張 十名

―休憩（審査）―

三 表彰式

（一）審査結果発表 審査員長

（二）表彰状贈呈

閉 会

尾木 和英

○ 審 査 員

尾木 和英 （審査員長） 東京女子体育大学名誉教授

井門 明洋 東京都公立中学校PTA協議会会長

長田 渚左 ノンフィクション作家

栗原 宏成 東京都教育庁指導部義務教育指導課長

大澤 裕之 東京都青少年・治安対策本部長

森山 寛司 東京都青少年・治安対策本部総合対策部長

○ 審査基準

（一）論旨・内容について

- ア 中学生らしい新鮮な主張であるか。
イ 個人の感想や体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
ウ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。
エ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。
オ 表現が適切であるか。

（二）論調・態度について

- カ 声、言葉は明瞭で聞きやすいか。
キ 話しぶりに熱意と迫力があるか。
ク 主張の内容が、聴衆に共感と感動を与えているか。
ケ 聴衆をよく見て、落ち着いて話したか。

【参考】平成30年度「中学生の主張 東京都大会」募集概要

1 応募資格

平成30年4月1日現在東京都内に在住または在学の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。

2 テーマ

- (1) 社会や世界に向けての意見、未来への希望や夢、提案など。
- (2) 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
- (3) テレビや新聞等で報道されている社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、自由でユニークな飾り気のない言葉でまとめたもの。

3 応募方法

- (1) 募集期間中に東京都のホームページに掲載する原稿用紙をB4判に印刷し、縦書き4枚程度に収めること。
- (2) 原稿は以下のように書出し、必ずステープラで右上を留めること。
1行目 題名
2行目 学校名、学年
3行目 氏名（ふりがな）
4行目～ 本文
- (3) コピーではなく、本人自筆による原本（ワープロ不可・ただし障害等による場合は可）を提出すること。
- (4) 応募は、1人1点（未発表の作品）に限る。
- (5) 応募原稿は原則として返却しない。ただし、返却希望がある場合は学校単位で返却する。

4 締 切

平成30年7月20日（金）

5 審査及び表彰

主催者において、大会の前に中学生の主張東京都大会発表者（出場者）10名及び努力賞10名を選考する。大会当日に出場者10名が、応募した原稿に基づいて5分程度の発表を行い、審査員の協議で知事賞、東京都教育委員会賞、優良賞を選考した後、努力賞を含む各賞受賞者に対する表彰を行う。

なお、発表者及び努力賞入賞者については、8月頃に学校を通じて結果を通知する。

6 その他

- (1) 知事賞受賞者を、独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催する「第40回 少年の主張 全国大会」の出場候補者として推薦する。
- (2) 応募者全員に、参加賞として記念品を贈呈する。
- (3) 受賞作品を発表文集にまとめ、学校等へ配布する。
- (4) 受賞者の写真、氏名、学校名、学年及び作品名を、東京都のホームページと発表文集に掲載する。

応 募 状 況

1 今年度の応募状況

(単位: 人、校)

応募者数				応募校数
1年生	2年生	3年生	計	
1,189	2,500	3,189	6,878	62

2 過去の応募状況

(単位: 人、校)

年度	応募者数	応募校数	年度	応募者数	応募校数
昭和 54	219	-	11	491	37
55	184	-	12	639	42
56	265	37	13	797	41
57	454	40	14	562	37
58	142	27	15	736	48
59	169	39	16	1,961	60
60	230	40	17	1,552	58
61	289	58	18	2,230	84
62	509	79	19	1,919	86
63	527	80	20	2,276	79
平成元	742	102	21	4,105	105
2	326	70	22	3,153	98
3	355	67	23	1,864	77
4	472	69	24	3,316	93
5	385	36	25	3,739	72
6	280	53	26	8,446	97
7	259	48	27	9,983	95
8	230	40	28	8,620	95
9	500	58	29	7,781	70
10	739	45			

前回までの入賞者

昭和54年度（第1回） 昭和54年9月13日・千代田区公会堂

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	少年として訴えたいこと	足立区立花畑北中学校・3年	安井正二郎
優秀賞	少年として訴えたいこと	東京学芸大学附属竹早中学校・2年	山本 祐子
	少年として訴えたいこと	港区立高陵中学校・3年	奥谷まゆみ
	私の家庭	目白学園中学校・2年	高橋 敏子
	私の家庭	目黒区立第一中学校・3年	岩崎 知可
	私の仲間	大田区立馬込東中学校・2年	上谷 啓之
	私の家庭	檜原村立北秋川中学校・3年	小泉さとみ
	私の仲間	港区立赤坂中学校・3年	大野 朋子
	いま学校で考えること	小金井市立緑中学校・3年	松延 美佳
少年として訴えたいこと	小金井市立緑中学校・3年	三木 暁朗	

昭和55年度（第2回） 昭和55年9月17日・東京都勤労福祉会館

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	非行は私の問題	葛飾区立金町中学校・2年	阿部ゆうりか
	全国大会出場（昭和55年11月24日・明治神宮会館）青少年育成国民会議会長賞		
優秀賞	中三として考えていること	小平市立第五中学校・3年	西山 是美
	自分を生きる	立川市立第九中学校・3年	山田 純子
	教育が中学校の友情に何をしたか	目黒区立第十中学校・3年	磯部大吾郎
	床に捨てられたガムに思う	羽村町立羽村第二中学校・3年	井沢英理子
	一匹の猫	世田谷区立富士中学校・3年	高松 幸子
	ともだち	北区立富士見中学校・1年	小出 大介
	地域のために私のやりたいこと	台東区立蔵前中学校・3年	辻浦 弘子
	今、考えること	港区立赤坂中学校・3年	小林 弘明
友達の大切さ	目黒区立第一中学校・2年	笹 祐子	

昭和56年度（第3回） 昭和56年9月17日・東京都勤労福祉会館

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	明るい家庭はみんなの努力で	江東区立深川第一中学校・3年	田名網明子
	全国大会出場（昭和56年11月7日・明治神宮会館）青少年育成国民会議会長賞		
優秀賞	大空へ飛びたつ前に	港区立赤坂中学校・3年	西村 恵摩
	国際障害者年について	目黒区立第一中学校・2年	十河 郁子
	いま学校生活で考えていること	葛飾区立金町中学校・3年	阿部ゆうりか
	非行について	練馬区立開進第三中学校・3年	笹川 北等
	国際障害者年に思う	足立区立上沼田中学校・3年	佐瀬 順一
	私は目的を持って高校受験をするのです	立川市立立川第九中学校・3年	吉武 淳子
	自分の夢に生きる	北区立富士見中学校・3年	三好貴美子
	人間関係について	田無市立田無第三中学校・1年	澤田 仁美
私の歩み	板橋区立加賀中学校・2年	越川 清美	

昭和57年度(第4回) 昭和57年9月21日・東京都勤労福祉会館

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	戦争と平和と私達	目黒区立第一中学校・3年	石見 文子
	全国大会出場(昭和57年11月7日・日本青年館)青少年育成国民議会会長奨励賞		
優秀賞	明日のため今日努力しよう	千代田区立麴町中学校・2年	山田 真帆
	好きなことに打ちこんで欲しい	練馬区立上石神井中学校・3年	前之園めぐみ
	カムバック・サーモン	八王子市立長房中学校・3年	早坂 一幸
	グループ活動と私	保谷市立明保中学校・2年	小坂紫陽子
	中学世代からの提言	江戸川区立瑞江第三中学校・3年	鞠子ひとみ
	百万人の手話	足立区立第一中学校・3年	滝元さおり
	ぼくの友達	台東区立福井中学校・1年	大木謙太郎
	悩みを聞いて欲しい	目黒区立第一中学校・3年	高橋 牧子
	今、中学校で	八王子市立由木中学校・3年	望月 淳

昭和58年度(第5回) 昭和58年10月4日・千代田区公会堂

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	僕の母は二分の一	北区立堀船中学校・3年	芳賀也崇志
優秀賞	ごちそうさま	足立区立第十六中学校・1年	古田みどり
	もっとおもしろいやりを持って	練馬区立関中学校・1年	富永亜希子
	道ばたで	台東区立福井中学校・2年	須崎理恵子
	学級委員として	渋谷区立笹塚中学校・2年	高橋 勝洋
	ボランティア活動に今問われるもの	女子学院中学校・2年	斉藤のゆり
	目的をもって生きること	世田谷区立用賀中学校・3年	星野 豊
	自己の確立	町田市立薬師中学校・3年	下園 昌彦
	今、学校生活の中で	清瀬市立清瀬第三中学校・2年	金田 幸子
	明日は私達の手で	足立区立第十六中学校・2年	関 聡美

昭和59年度(第6回) 昭和59年9月6日・東京都勤労福祉会館

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	退一步想	板橋区立板橋第一中学校・2年	桂 久美子
優秀賞	3B運動	明治大学付属中野中学校・3年	山田 智之
	私の愛する学校、十三中と友	足立区立第十三中学校・3年	山中 信子
	学校生活の中での奉仕とは	台東区立蔵前中学校・3年	五十嵐里香
	愛、世界にかける橋	江東区立深川第一中学校・3年	佐々木秀美
	よりよい中学校生活をめざして	板橋区立志村第五中学校・1年	笠間 勝久
	挨拶と人の輪	清瀬市立清瀬第五中学校・2年	八代 牧
	質素な中国の生活から学んだこと	小平市立花小金井南中学校・3年	長井 勝
	一つの命	駒沢学園女子中学校・3年	白井 友子
	一枚の葉書	立川市立立川第九中学校・3年	谷野 泰史

昭和60年度（第7回） 昭和60年10月2日・経団連会館

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	祖母に学ぶ	江東区立深川第一中学校・3年	金井 里佳
優秀賞	再建運動に寄せて	品川区立東海中学校・2年	小野村比佐
	ぼくたちと自立	狛江市立狛江第四中学校・3年	奈良 暢明
	勇気も思いやりから	練馬区立関中学校・3年	榊原倫一郎
	渋谷心障センターへ行って	台東区立蔵前中学校・2年	三品 佳子
	「優しさ」のこと	荒川区立第五中学校・1年	竹内 亜紀
	学校再建・完成に向けて	品川区立東海中学校・2年	鎌田 征司
	蛍の里をもっときれいに	青梅市立第六中学校・2年	横田久美子
	友	練馬区立開進第三中学校・2年	菅 由香
	「自由」とは何だろう	中野区立第四中学校・3年	松永 春央

昭和61年度（第8回） 昭和61年10月2日・砂防会館ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	ボランティア活動	板橋区立第一中学校・3年	村上 淳
優秀賞	命の尊さ	練馬区立関中学校・2年	馬田 操
	私は先生になりたい	練馬区立開進第三中学校・1年	平田かおり
	私達の二十一世紀	北区立桜田中学校・3年	富田 愛美
	「あいさつ」のこと	足立区立上沼田中学校・3年	塚本三保子
	自然と私達	駒沢学園女子中学校・2年	川路 時子
	私たちはどう生きるべきか	品川区立東海中学校・3年	北川 明子
	掃除の大切さ	渋谷区立上原中学校・2年	伊達 昌世
	青春時代の生き方	町田市立南成瀬中学校・3年	吉田 晶
	私たちの「オアシス運動」	足立区立鹿浜中学校・3年	中野亜理佐

昭和62年度（第9回） 昭和62年10月6日・東條会館ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	チョゴリ	三多摩朝鮮第二幼初中級学校・2年	曹 小夜
全国大会出場（昭和62年11月8日・日本青年館）青少年育成国民会議会長奨励賞			
優秀賞	豊かな心で	駒沢学園女子中学校・3年	松田 享子
会長奨励賞	言葉を通じて思うこと	千代田区立麹町中学校・2年	堀口 奈美
	よりよい環境を私達の手で	渋谷区立外苑中学校・3年	小河 賢治
	家族のつながり	北区立桜田中学校・3年	富田佐智子
	家族のしあわせ	町田市立町田第三中学校・3年	龍野 紋香
	かたつむり	桐朋女子中学校・2年	正木 綾
	日本に帰ってきて	北区立堀船中学校・3年	小倉 斌
	助け合いの心	八王子市立打越中学校・3年	遠藤亜矢香
思いやり	板橋区立板橋第一中学校・3年	水谷 裕子	

昭和63年度 (第10回) 昭和63年10月6日・東商ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	勉強より大事な勉強	桐朋女子中学校・3年	正木 綾
	全国大会出場(昭和63年11月6日・日本青年館)特別奨励賞		
優秀賞	言葉の違いを超えて	渋谷区立外苑中学校・3年	小山美由紀
会長奨励賞	小さな国際人として生きる	板橋区立板橋第一中学校・3年	吉川 陽子
	人の心	千代田区立一橋中学校・2年	志田実希子
	書写を通じて	秋川市立秋多中学校・3年	成定 愛子
	何のために勉強をするのか	町田市立南大谷中学校・3年	芦川 泰子
	僕の決心	板橋区立志村第一中学校・2年	西垣 謙
	このごろのテレビに思うこと	町田市立成瀬台中学校・3年	鳥 愛子
	今、いじめを考えて	板橋区立板橋第一中学校・3年	近藤 裕子
	思いやりの心	渋谷区立上原中学校・3年	日下部 覚

平成元年度 (第11回) 平成元年10月3日・東商ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	足	西東京朝鮮第二初中級学校・3年	鄭 淳実
優秀賞	師の発見	共立女子中学校・3年	郡司知香子
会長奨励賞	国際社会って何だろう?	荒川区立道灌山中学校・3年	藤田友紀枝
	同じ人間なのだから	八王子市立石川中学校・3年	田中 桃子
	誰もが住みやすい町づくり	町田市立町田第三中学校・1年	臨光 美佐
	ボランティアって何でしょう	台東区立蓬萊中学校・3年	山本優里亜
	部活で得た「感動」	北区立桜田中学校・3年	近藤 真理
	人間の絆	渋谷区立原宿中学校・3年	稲石 大祐
		町田市立成瀬台中学校・3年	武田 香里
	国際化社会について思うこと	町田市立真光寺中学校・3年	角田 善彦

平成2年度 (第12回) 平成2年10月4日・東商ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	お年寄りとともに	恵泉女学園中学校・3年	田中 睦美
優秀賞	思いやりの心	町田市立町田第三中学校・2年	臨光 美佐
会長奨励賞	近隣やすらぎの街	練馬区立石神井南中学校・3年	吉本亜希子
	見えない目	板橋区立板橋第一中学校・3年	酒井くみ子
	「読める」「書ける」喜びを...	青山学院中等部・2年	正木 朋
	苦しみを乗り越えて	町田市立南大谷中学校・3年	松井 竜作
	地球を救う心「風の谷のナウシカ」を見て	足立区立第三中学校・2年	鈴木奈穂子
	限りない愛を伝えたい	渋谷区立笹塚中学校・2年	須永ゆり子
	生きることの意味	共立女子中学校・3年	上田 啓子
	読書の勧め	千代田区立一橋中学校・3年	仙波 正樹

平成3年度（第13回） 平成3年10月8日・東京都児童会館ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	ボランティア活動と本当の目	多摩市立貝取中学校・3年	末吉 優子
優秀賞	母の笑顔	八王子市立松が谷中学校・3年	渡辺 友恵
会長奨励賞	聞こえない叫び	町田市立つくし野中学校・3年	渡辺まどか
	思いやり	共立女子中学校・3年	阿部はるひ
	普通に生活できる喜び	町田市立真光寺中学校・3年	高野 寛明
	生命の大切さ	町田市立町田第三中学校・3年	臨光 美佐
	地球を守る	共立女子中学校・3年	飯牟禮充代
	親友、それは心の支えとなる人	立川市立立川第二中学校・3年	黄 莉香
	教育産業について	町田市立鶴川中学校・3年	岡野佐弥子
	私の名前	西東京朝鮮第二初中級学校・3年	李 玲華

平成4年度（第14回） 平成4年10月7日・東京都児童会館ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	わかば学級と私	町田市立町田第一中学校・3年	五十子若葉
優秀賞	初めの一步	東京学芸大学附属竹早中学校・3年	上岡 洋子
会長奨励賞	戦争について考える	町田市立金井中学校・3年	小林 千尋
	私は地球人	西東京朝鮮第二初中級学校・3年	金 美香
	何か忘れていませんか？－今、私達にできること	町田市立鶴川中学校・3年	山邊久美子
	物を大切にすること	青梅市立第六中学校・1年	宿谷美由紀
	助けあう力	町田市立真光寺中学校・2年	稲津 静香
	これからのリサイクルのあり方	町田市立成瀬台中学校・3年	三谷 隆
	今も残る戦争の爪跡－沖縄を訪れて－	文京区立第七中学校・3年	今 弘枝
	ぼくの主張	聖学院中学校・2年	米井 聡

平成5年度（第15回） 平成5年10月5日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	“けいこちゃん”を家族に迎えて	北区立飛鳥中学校・3年	坂部 愛
優秀賞	ぼくの耳が悪くなって	台東区立下谷中学校・3年	植木 康則
会長奨励賞	はじめのいっっぱ	葛飾区立金町中学校・3年	八巻 美保
	美しい環境を守りたい	八王子市立由井中学校・2年	富澤 裕介
	はやく日本語を覚えたい	荒川区立日暮里中学校・3年	秋 允河
	心の傷は治らない	品川区立戸越台中学校・1年	北神 智子
	体験して学んだこと	秋川市立秋多中学校・3年	尾又千恵子
	可能性と追求心	八王子市立浅川中学校・3年	山田 雅穂
	消防少年団とこれからの私	江戸川区立松江第五中学校・3年	寺澤ひろみ
	家族	駒沢学園女子中学校・3年	岸田 和泉

平成6年度（第16回） 平成6年9月29日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	あたたかい目	荒川区立日暮里中学校・3年	尾崎 幸恵
優秀賞	差別	駒沢学園女子中学校・3年	韓 礼美
会長奨励賞	自分の目と耳と心で感じること	杉並区立西宮中学校・3年	里吉 希
	老人	東京学芸大学附属大泉中学校・3年	高畑奈央子
	自分の意見の大切さ	杉並区立宮前中学校・2年	國本 博義
	歓送会、そして副会長になって	千代田区立九段中学校・3年	幕内 暁子
	ゴミ問題について	東京中華学校・1年	朱村 祥
	大切な友達	杉並区立宮前中学校・1年	吉野未紗生
	十七枚のハガキが教えてくれた戦争 「共に生きる社会」をめざして	新宿区立落合第二中学校・3年 八王子市立第三中学校・3年	斎藤 和歌 大石 友里

平成7年度（第17回） 平成7年10月3日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	僕たちにできること	荒川区立日暮里中学校・1年	高 宗哲
優秀賞	家族	世田谷区立八幡中学校・3年	斉藤かおり
会長奨励賞	国際的中学生を目指して	杉並区立西宮中学校・3年	山中 大樹
	戦争のない世界へ	世田谷区立八幡中学校・3年	星野 玲子
	私の夢	板橋区立志村第四中学校・3年	石司 えり
	「ランナー」	西東京朝鮮第二初中級学校・3年	崔 愛美
	壁の前で	北区立浮間中学校・2年	坂田 菜乃
	現代社会への危機	昭島市立拝島中学校・2年	田尻みのり
	「翼をください」 「一瞬の中にある煌き」	台東区立下谷中学校・2年 北区立新町中学校・3年	岡村 朋子 三田 直穂

平成8年度（第18回） 平成8年10月3日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	蜘蛛の巣	台東区立下谷中学校・3年	岡村 朋子
	全国大会出場（平成8年11月10日・日本青年館）内閣総理大臣賞		
優秀賞	子供の気持ち	江東区立第四砂町中学校・2年	辻子ゆうき
会長奨励賞	一人がみんなのために みんなが一人のためにできること	府中市立府中第三中学校・2年	谷田部 慧
	人間らしく生きていける世界	中央区立銀座中学校・3年	加納沙也香
	初めの一歩	田無市立田無第一中学校・3年	小南 梓
	グラウンドにねそべって	杉並区立宮前中学校・3年	小峯 和明
	サヨウナラ「ニッポニア・ニッポン」	北区立堀船中学校・2年	遠藤 夏子
	みんなに支えられて	荒川区立日暮里中学校・1年	酒井もと子
	心の中に壁を作らないで 僕の勉強	荒川区立日暮里中学校・1年 品川区立城南中学校・2年	大吉秀次郎 木之下健一

平成9年度（第19回） 平成9年10月7日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	チョコグリ	西東京朝鮮第二初中級学校・3年	黄 愛理
優秀賞	わかってください	町田市立真光寺中学校・2年	稲津 夢香
会長奨励賞	金色の髪	八王子市立松が谷中学校・3年	永島美和子
	ボランティア活動をして	三鷹市立第四中学校・2年	小島 佑介
	素直になりたい	調布市立第三中学校・1年	松隈 裕美
	心に響くふれ合いをいま…	文教大学付属中学校・2年	松本 真実
	私の妹	千代田女学園中学校・2年	藤澤阿弥子
	運命の試練	荒川区立日暮里中学校・2年	石田 哲雄
	学校の規則について	文京区立第六中学校・2年	島田 真衣
	私の存在	共立女子中学校・3年	山崎 沙重

平成10年度（第20回） 平成10年10月7日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	私の気持ち	荒川区立第五中学校・1年	星野佐世子
優秀賞	「私の宝もの」日本での貴重な体験	東京韓国学校中等部・2年	金 俊真
会長奨励賞	人の気持ちを見つめ直して	調布市立調布中学校・2年	深澤 雄
	いつか飛び立つ日まで	調布市立第三中学校・2年	松隅 裕美
	自立するためのメッセージ	目黒区立第四中学校・2年	荻野 緑
	みんな一人では生きてはいけない	足立区立第十四中学校・1年	明石 清人
	自由と自治	杉並区立宮前中学校・2年	岩切 ゆい
	いじめについて	文京区立第六中学校・2年	山田 文子
	大人と自由	北区立王子中学校・3年	末松あみか
	心の教育って？	北区立堀船中学校・3年	佐貫 洋子

平成11年度（第21回） 平成11年10月6日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	本当の幸せとは…	港区立青山中学校・3年	秋田 絵麻
全国大会出場（平成11年11月14日・日本青年館）総務庁長官賞			
優秀賞	子供の気持ち	杉並区立宮前中学校・3年	渡部明日香
会長奨励賞	大切な命	杉並区立宮前中学校・1年	岡崎 美帆
	言葉よりも大切なこと	創価中学校・3年	竹村 陽子
	父の働く姿を見て	足立区立第十四中学校・2年	権藤 幸典
	外国人差別	八王子市立松が谷中学校・3年	長山 夏子
	「壁」を乗り越えて	調布市立第三中学校・3年	広瀬さやか
	少年兵を知っていますか	文京区立第十中学校・3年	熊谷 恵理
	ありがとうの危機	小金井市立緑中学校・1年	加藤 勇人
世界を見る目	あきる野市立秋多中学校・3年	山崎 幸	

平成12年度 (第22回) 平成12年9月24日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	弟	西東京朝鮮第二初中級学校・3年	尹 彰希
優秀賞	僕達をもっと見て下さい	杉並区立宮前中学校・3年	太田 裕之
会長奨励賞	ちびで悪いか	杉並区立宮前中学校・1年	田中 万智
	妹 - ピアノで話そう -	大田区立大森第八中学校・3年	佐野 暁子
	私の宝物	目白学園中学校・3年	山崎 茜
	相手の気持ちを理解して	暁星中学校・3年	依田 靖
	汗と涙と笑顔の父親	杉並区立和田中学校・3年	佐藤 慶太
	人の大切さ	練馬区立練馬中学校・3年	田代 桃子
	将来の夢-バリアフリー-	駒沢学園女子中学校・3年	川口 遊喜
本当の勉強とは何か	あきる野市立増戸中学校・2年	田邊真理子	

平成13年度 (第23回) 平成13年9月22日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	努力が教えてくれた事	足立区立第十四中学校・1年	荒谷真理子
	全国大会出場(平成13年11月11日・国立オリンピック記念青少年総合センター)内閣総理大臣賞		
優秀賞	自分のためには人のため	駒沢学園女子中学校・3年	佐藤 萌子
会長奨励賞	命のメッセージ	荒川区立南千住第二中学校・3年	渡辺奈央子
	軽べつが目	杉並区立和田中学校・3年	本田 美咲
	心の叫びに優しさを	駒沢学園女子中学校・1年	廣部 優海
	やり直せるって素晴らしい	中央区立銀座中学校・2年	三浦 早知
	母へ	杉並区立宮前中学校・3年	千賀奈津子
	ありがとう、おばあちゃん	荒川区立第五中学校・2年	山中 悠香
	あたたかい目で...	杉並区立宮前中学校・2年	岩切 さや
たくさんのやさしさ	小金井市立緑中学校・3年	横山 明子	

平成14年度 (第24回) 平成14年9月14日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	命の大切さ	足立区立第十四中学校・2年	河埜 行彦
優秀賞	自然の未来	杉並区立和田中学校・1年	針ヶ谷健志
会長奨励賞	公共の場でのマナーについて	武蔵野東中学校・3年	内田眞由美
	地球は人間のもの?	東久留米市立西中学校・1年	宇田川しおり
	忘れかけていた「大切なもの」	足立区立第十四中学校・2年	丹下 泰之
	あいさつ	共立女子中学校・3年	遠藤 春香
	心の支え	武蔵野東中学校・1年	神山 由香
	人間として向き合うこと	創価中学校・3年	柴田 浩美
	最後のプレゼント	あきる野市立西中学校・3年	大久保翔吾
ありがとう	杉並区立宮前中学校・3年	長澤 侑美	

平成15年度 (第25回) 平成15年9月13日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	おやじが泣いた日	大田区立大森第八中学校・3年	佐藤 順平
優秀賞	「思いやり」のある社会に	あきる野市立秋多中学校・3年	中村 真理
会長奨励賞	障害という心の壁を越えて	創価中学校・2年	青木 優美
	拒食症	杉並区立宮前中学校・3年	岡野のぞみ
	精一杯、生きる	杉並区立宮前中学校・3年	川畑真梨恵
	私の好きな町	星美学園中学校・3年	後藤 尚乃
	私は変わった	練馬区立練馬中学校・3年	鈴木友喜奈
	継続は力なり	杉並区立松溪中学校・1年	高橋 杏子
	店の駐輪場の利用	調布市立調布中学校・2年	中村 美緒
	「代償」	明治大学付属明治中学校・3年	葉騰 寛喜

平成16年度 (第26回) 平成16年9月12日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	たった一つの…	足立区立第十四中学校・1年	カス・サレニール
全国大会出場(平成16年11月14日・国立オリンピック記念青少年総合センター)会長奨励賞			
優秀賞	みんなの力で頑張る	品川区立東海中学校・2年	皆川 翔子
会長奨励賞	一つの命が教えてくれたこと	武蔵野東中学校・2年	小倉 藍歌
	弟・恵太ーそして命ー	あきる野市立増戸中学校・3年	岸塚 康子
	ルール	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	瀬口 真生
	物の豊かさ・心の豊かさ	調布市立調布中学校・3年	中村 美緒
	夢を変えた言葉	足立区立第十四中学校・1年	西川 真美
	世界に一つだけの命	吉祥女子中学校・3年	丸大 未智
	言葉	立正大学付属立正中学校・3年	宮本 智暎
	真の強さの意味	八王子市立石川中学校・3年	山田 愛里

平成17年度 (第27回) 平成17年9月11日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	今に生かそう「江戸仕草」を	墨田区立立花中学校・3年	渡辺 隆介
全国大会出場(平成17年11月13日・国立オリンピック記念青少年総合センター)会長特別賞			
優秀賞	私が出たもの	あきる野市立秋多中学校・2年	岸野 美奈
会長奨励賞	「ハッピー」	板橋区立志村第四中学校・1年	阿部 要
	ボランティア活動をして	あきる野市立東中学校・3年	岡山 李緒
	不登校から学んだこと	調布市立第五中学校・3年	今野 夏希
	気付かせてもらったこと	足立区立第十四中学校・2年	関根 鮎
	私の過去と今の想い	武蔵野市立第一中学校・1年	中村 絵美
	私の大切な家族	練馬区立上石神井中学校・3年	盛 愛
	一人じゃない	駒沢学園女子中学校・3年	横尾 恵
	将来の夢	杉並区立松溪中学校・3年	渡辺 美優

平成18年度 (第28回) 平成18年9月10日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	ルールを守る心	東京都立両国高等学校附属中学校・1年	杉山 俊
優秀賞	言葉の持つ力	葛飾区立常盤中学校・1年	本間 千晶
会長奨励賞	助け合う勇氣	駒沢学園女子中学校・3年	一瀬 裕美
	地域のふれあいの大切さ	東久留米市立大門中学校・2年	北島 幸妃
	命のつながり	杉並区立杉森中学校・3年	工藤 杏子
	本当の幸せとは	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	完山友香莉
	広げよう!あいさつの輪	北区立稲付中学校・2年	野寺やすみ
	きれいな町を目指して	荒川区立原中学校・3年	平塚 直史
	魔法の笑顔	千代田区立九段中等教育学校・1年	福田 耀子
	家族と「生きる」	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	横山 愛聖

平成19年度 (第29回) 平成19年9月17日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	がまんの美徳	東京学芸大学附属小金井中学校・3年	入田 真实
優秀賞	前に向かって	港区立高松中学校・1年	葭原 華陽
会長奨励賞	将来の夢	江戸川区立小松川第一中学校・2年	赤嶺 綾乃
	「普通」の定義	西東京朝鮮第二幼初中級学校・3年	権 景華
	図書館の本は誰のもの	あきる野市立五日市中学校・3年	清水 美里
	共に生きていくために	東京都立両国高等学校附属中学校・2年	菅澤 藍
	名前	東京都立両国高等学校附属中学校・2年	杉山 俊
	夏が来る	八王子市立ひよどり山中学校・3年	関山 友理
	銀	杉並区立和田中学校・3年	中村 綸子
	ドナーになった友人	東京シューレ葛飾中学校・2年	吉田 もも

平成20年度 (第30回) 平成20年9月15日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	食べることは、心をつくること	葛飾区立常盤中学校・2年	郡司 佳奈
優秀賞	「いきる」	江戸川区立小松川第一中学校・3年	赤嶺 綾乃
会長奨励賞	一枚の写真を通して	中野区立第五中学校・2年	青山紗都子
	おばあちゃんとの挨拶	東京学芸大学附属小金井中学校・3年	阿吹 綾香
	がんばることを楽しむ	千代田区立九段中等教育学校・3年	大林 尚嗣
	命の大切さ	東京文化中学校・1年	谷 ありす
	エレベーター内のあいさつ	東京都立桜修館中等教育学校・2年	藤井 愛衣
	心配り・目配り・心配りを大切に	東京学芸大学附属国際中等教育学校・2年	水田 詩文
	本当の家族とは ～養育家庭制度を通して～	八王子市立七国中学校・2年	山口そな恵
	思いやりの道德心	足立区立第四中学校・3年	横田 睦月

平成21年度 (第31回) 平成21年9月13日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	未来を築く思いやり	府中市立府中第五中学校・3年	松本茉美子
優秀賞	言葉で伝える大切さ	杉並区立和田中学校・3年	水上 朋子
会長奨励賞	祖父の教え	港区立高松中学校・3年	井戸川弘毅
	お互いさま精神	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	入江 万優
	メールとコミュニケーション	東京都立桜修館中等教育学校・3年	岸 美里
	「MOTTAINAI」	武蔵野東中学校・2年	坪井千羽実
	金色のルール	東京都立桜修館中等教育学校・3年	林 眞樹
	「教えない」という教え	あきる野市立五日市中学校・3年	久永明日葉
	十人十色の薬味	東京電機大学中学校・3年	藤原 章子
父さん母さん 「ありがとう」	青梅市立第三中学校・1年	松藤 晶子	

平成22年度 (第32回) 平成22年9月12日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	僕の妹	葛飾区立青葉中学校・1年	光丸 英樹
全国大会出場(平成22年11月7日・国立オリンピック記念青少年総合センター)国立青少年教育振興機構奨励賞			
優秀賞	地域活動でふるさとを豊かにしよう	東京学芸大学附属小金井中学校・1年	出川 佳歩
	言葉と命	世田谷区立太子堂中学校・3年	田中弥也子
会長奨励賞	同情するなら、手を貸そう!!	葛飾区立大道中学校・2年	糸賀 貴優
	僕と挨拶の十三年間	八王子市立七国中学校・1年	宇野 勝哉
	「口で話そう、伝えよう」	板橋区立板橋第一中学校・3年	小林 豪
	小さな一言の小さな勇気	東京学芸大学附属小金井中学校・1年	佐藤 陽
	大事な気持ち	星美学園中学校・3年	高野 未来
	命の大切さ～私が語れるようになったこと～	八王子市立七国中学校・3年	武石 彩香
「見えないものに包まれて」	東大和市立第一中学校・3年	森脇 薫子	

平成23年度 (第33回) 平成23年9月11日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	家族の本当の意味	葛飾区立常盤中学校・2年	齊藤 麗香
全国大会出場(平成23年11月13日・国立オリンピック記念青少年総合センター)国立青少年教育振興機構理事長賞			
優秀賞	犬を飼う責任	葛飾区立四ツ木中学校・1年	田原 佳苗
	私のお姉ちゃん	中村中学校・1年	堀 由乃
会長奨励賞	「桜井さんのコスモス」	中野区立第五中学校・2年	青山 広樹
	身近な伝統を未来に伝えよう	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	出川 佳歩
	「いま」を変えていく	武蔵野東中学校・1年	鎌本 紗衣
	音の頼り	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	佐々木亜利
	友達	東村山市立東村山第五中学校・3年	友利 奈月
	計画停電の夜	芝中学校・2年	庭 祐
「江戸の心、平成の心」	東京都立両国高等学校附属中学校・2年	樋山 輝	

平成24年度 (第34回) 平成24年9月9日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	勇気を出して踏み出そう	調布市立第五中学校・3年	松本 郁成
優秀賞	五文字の言葉で	東京都立立川国際中等教育学校・3年	隈江 加奈
会長奨励賞	心のキャッチボール	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	阿知波ひとみ
	母の存在	杉並区立和田中学校・2年	河壽 陽子
	「もっと幸せを感じて」	東京都立桜修館中等教育学校・2年	榊原理彩子
	万引き	東京都立立川国際中等教育学校・3年	高橋 沙綾
	人の温かさ	東京都立南多摩中等教育学校・1年	千野 杏子
	神様からの挑戦状	青梅市立第三中学校・1年	長谷川笑花
	祖母が私に教えてくれた事	清瀬市立清瀬第五中学校・2年	山下 澄恋
	「命の意味」	東京都立桜修館中等教育学校・2年	山下 大器

平成25年度 (第35回) 平成25年9月8日・東京都庁議会棟都民ホール

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	手をさしのべること	東京都立富士高等学校附属中学校・3年	深澤ゆかり
優秀賞	携帯はいらない	町田市立鶴川第二中学校・2年	鈴木 彩乃
	優しさの連鎖、はじめの一歩	東京都立武蔵高等学校附属中学校・3年	福島ゆきの
会長奨励賞	「人をつなぐ言葉」	稲城市立稲城第四中学校・2年	石塚なつの
	勇気の向こうに	葛飾区立立石中学校・1年	小西 泰聖
	コミュニケーション能力を高めよう	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	坂井 真衣
	強くするもの	調布市立第四中学校・3年	佐藤 亜桜
	「優しさ」	國學院大学久我山中学校・3年	下田 百江
	受け継ぐべき生き方	世田谷区立玉川中学校・2年	鈴木 日和
	あいさつは大切	東京都立桜修館中等教育学校・1年	十時 優太

平成26年度 (第36回) 平成26年9月15日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
最優秀賞	助け合いにつながる言葉	立川市立立川第六中学校・3年	小林 晴日
	全国大会出場(平成26年11月9日・国立オリンピック記念青少年総合センター)奨励賞		
会長賞	「あの日から」	品川区立城南中学校・3年	渡来 由麻
	規則よりも大事なこと	足立区立第一中学校・3年	穴穂 省伍
	おもてなしの心	葛飾区立東金町中学校・1年	石出 咲紀
	前進とは	杉並区立和泉中学校・3年	加藤 実優
	高齢社会と向きあう	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	阪本 雅登
	言葉に責任を持つということ	杉並区立井荻中学校・3年	末松 愛菜
	空き缶と私の存在	國學院大学久我山中学校・3年	杉浦 有香
	小さな絆を大きな輪に変えよう	立川市立立川第二中学校・3年	天神 マオ
みんなに「ありがとう」と伝えたい	目黒区立東山中学校・3年	福住 旺穂	

平成27年度 (第37回) 平成27年9月6日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
知事賞	中国と日本の狭間にて	板橋区立中台中学校・3年	張 哲語
	全国大会出場(平成27年11月8日・国立オリンピック記念青少年総合センター)文部科学大臣賞		
東京都教育委員会賞	私のたった一つの決まり事	武蔵村山市立第五中学校・3年	滝島 涼
	広島へ行き学んだこと	清瀬市立清瀬中学校・3年	降矢 麻友
	パラリンピックへの夢	目黒区立第七中学校・3年	吉越 奏詞
会長賞	小さな気遣いを大切に	星美学園中学校・3年	井出 薫乃
	あいさつのすゝめ	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	伊藤 万由
	「トイレ掃除から学ぶ想い」	立川市立立川第三中学校・3年	加藤 美袖
	助け合い、支え合う	國學院大學久我山中学校・3年	松尾 亜祐
	小さな器	品川区立小中一貫校品川学園・3年	柳町 爽瑛
	思いやりの大切さ	東京都立両国高等学校附属中学校・1年	渡邊 友宏

平成28年度 (第38回) 平成28年9月11日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
知事賞	感じる	杉並区立井荻中学校・3年	今本 吉治
東京都教育委員会賞	母への言葉	葛飾区立四ツ木中学校・3年	牛久 友萌
	命の大切さ	荒川区立第七中学校・2年	吉田 真萌
会長賞	人のことを考える	足立区立六月中学校・3年	相場 弘貴
	あいさつの人	渋谷区立原宿外苑中学校・3年	池山 明恵
	おもてなしの国、日本	東京都立桜修館中等教育学校・1年	今井 一輝
	命への感謝	立川市立立川第六中学校・3年	小林 岳
	ぼくが一人で電車に乗れるようになるまで	共栄学園中学校・1年	榊原 丈稀
	弱小野球部の軌跡	世田谷区立用賀中学校・3年	白井 蓮
	言葉とナイフと ^{たましい} 霊と	東京学芸大学附属小金井中学校・3年	吉川 仁

平成29年度 (第39回) 平成29年9月2日・東京都庁大会議場

賞	発表題名	学校・学年	氏名
知事賞	私にできること	東京都立桜修館中等教育学校・2年	柴田 葉
東京都教育委員会賞	気持ちを伝える大切さ	葛飾区立本田中学校・1年	飯沼 凜
	国境を越えた絆を	東京都立大泉高等学校附属中学校・1年	黒澤 珠月
会長賞	言葉のすばらしさ	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	大川 彩希
	いじめを減らすためには	立正大学付属立正中学校・3年	杉野 太一
	本当の優しい心	立川市立立川第二中学校・2年	常盤 奏
	いつも感謝の気持ちを	武蔵野女子学院中学校・3年	廣瀬 加奈
	祖父からのメッセージ	東京学芸大学附属小金井中学校・2年	宮崎 秋
	努力は格好いい	東京都立立川国際中等教育学校・1年	村岡 菜々
	便利さの檻	東京都立立川国際中等教育学校・1年	渡辺 結心

平成30年度

平成30年12月発行

平成30年度 中学生の主張東京都大会 発表文集

編集・発行／東京都

〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
東京都庁第一本庁舎北塔34階
電話 (03) 5388-3064

印刷／正和商事株式会社

〒161-0032 東京都新宿区中落合一丁目6番8号
電話 (03) 3952-2154



本事業は独立行政法人国立青少年教育振興機構より委託を受けて実施しております。

